

飾り付けをして、樂隊を載せて町々を率廻はしたり、異様な粧ひをした人間に行列さして、物見高い人の心を寄せ集めて、廣告すべき事柄を吹聴し廻らせるのぢやが、未だ日本に見えないのは、ヨボ／＼した老人にシルシハットでも被らせて、其の胸へも廣告板をアラ下げ、又高い高札のやうな札へ廣告を記して、其の重心を取るため綱などを付けて持たせて、之を悠々と往來させるのぢや、往來が混雑して押返されもせぬ所へ、樂隊馬車や異装の行列を回らせるとも六ヶ敷から、ツイ斯様工夫も仕出したのであらう、老人がツイ／＼いふ大混雑の間を側目も觸らずに濟し込んで、悠々然として練て行く態、先づ可笑くて、其れに高い高札を擔いでるのぢやから、自然人目も惹くといふ始末ぢや

○ ヒーローとか、サンライズとか、何々麥酒などの廣告を畑といはず山といはず、往來する瀛車の中から見える様に出して置くのが我が國でも流行るので、中には風景を害するとかいつて立腹する人もあるやう

ぢやが、米國では其れ處でない、瀛車の道筋、停車場近傍などには、其れは驚く程澤山な廣告があつて、中には素張らしく思ひ切た大きな廣告もある、紐育のハドソン河の對岸の岡の上に拵へてある大文字などは數哩先からも見える圖抜けて大きなものぢや

○ 往來で馬が斃れる、是れを通行の邪魔にならぬやうに横路へ引込んで片付けて置いて、何か始末しやうとする間に、例の彌次馬が何ぢや／＼と黒山の如くに集る、何で死んだとか何するのぢやとかツイ／＼言てる、何時の間にか人混の下を潜つて來て、死馬の太腹へビタリ張紙をする者が有る、何ぢや／＼と多人數で不思議そうに見ると、何のとぢや、賣藥の廣告である、イヤ廣告に抜目のない敏捷さは呆れるばかりで無いか

○ 西部の桑港の方が廣告法が上手ぢやといふ評判もあるので、東部の紐育などからも視察に來る人もあるげな、米人が廣告に注意するのに



深いとは是れでも分る

○米國は實に廣告國で、米人は幾んど廣告人種といつても宜からう

### 第二十四 新聞國人種

○米人は廣告人種でまた新聞國人種ぢや、尤も廣告は其の道の者の必要から出て随つて其の關係者丈けのするところやが新聞は左様でない、一般の者が總て必要とし快樂として見るので幾んど新聞を買はぬ家なく、新聞を讀まぬ人なしといつて宜からう

○其の國中で一流の新聞紙と、其の住ッ居る土地の新聞紙と、生れ故郷の新聞紙と、少くも三通りを讀むといふのが先づ米人普通の流儀である、随つて如何なる片田舎にでも新聞紙が發行されて、人口百人の一小村落と雖も週報ながら尙ほ一の新聞紙を持てるといふ有様ぢや

○婆アさんでも娘でも、政治上の評論までして大統領の公人物評とか、

マニラ戦争の是非とか、列國の之に對する意向とかを喋々する

○寄ると觸ると早やも饒舌りが始まつて、殊に婦人は人の顔さへ見るとお世辭を眞つ向から振り掛けるのを口開きに喋々として幾んど倦む色が無い、眞逆無意味なとばかりも饒舌立てられぬ、何して左様く話の種に盡きぬかと思へば、千言萬語多くは是れ當日の新聞紙より得來るもので、新聞紙の記事に尾鱗を付けたり、種々の批評したり、想像を加へたりなどして、中く面白可笑く話し合ふのぢや

○茲に於て米國新聞の家庭に於ける欠く可らざるものたるのが分る、而して又新聞紙の感化力の意外に偉大なとも推測し得られる

○毎朝市街鐵道車に乗ると、乗合のものが總て新聞を讀んで、新聞でも手にせぬ者は何だか間が抜けて顔までが馬鹿に見えるやうぢや、夕方亦其の通りで、是れは人々が出勤掛けには朝刊の新聞を、歸り掛けには夕刊の新聞を讀んでるのぢや



○斯ういふ風で、往來する男子で一二種の新聞紙をポケットか手にせぬは無いといふ位めで、而して家内でも朝晩の食卓には新聞紙が幾んど食卓に肉刀と一所のやうに供へられるといふ有様ぢや

○新聞紙を月極めで購讀する外に、又幾種類となく毎朝毎夕購讀するのが米人の流儀で、町々辻々には屹度屋臺店のやうな小さな處へ新聞雑誌を賣てるのがあつて、又たホテルとか、停車場とか、何でも少し人の混合ふ處へは屹度小供の新聞賣子が澤山來る

○朝飯前に一寸角の辻へ行て靴を磨かせながら、新聞を買て來るといふ風で、至極手軽に便利に新聞が買はれる

○其れから新聞も亦太だ安い、紐育では大抵な新聞が一仙(我が二錢)で、紐育へラルド丈けが三仙ぢや、而して新聞社では日に幾度となく號外を出して盛んに賣り立てる、此の號外は、日本ならば、月極の讀者へは無代で配達するから、新聞社の方で、號外を出せば出す程儲かるといふ

風ぢやが、米國では必らず代價を取るから、出せば出す程儲かるので、新聞社も悦び競ふて號外を發行する傾きがある

○其の又號外が極めて大袈裟なもので、素ばらしい大きな字で「英杜意に開戦す四千人殺されたり」など記して置くから、人々競ふて買ふ、買つて見ると種々意外なとや、又有りそうなどが書いて、一番仕舞に「トイふ説ありとの電報歐洲の何々より到達す」など書てある、人を馬鹿にしたやうな書振で、斯んなとは毎々ぢやけれど、買手の方では何時何様などが眞實に書いてあるか分らぬから、ドウしても買て見ねばならぬ、買手は「ナアにシャイナル新聞の號外などが當になるものか」とクナして掛るが、去とて之を買て見ねば氣が濟まぬのぢや、新聞社の遣方が上手な故もあるうが、畢竟米人が新聞を好んで讀まずには暮されぬといふ氣質であるからぢやろう

○其れで新聞の盛なとは驚ろく程で、紐育へラルドが毎朝三十五萬枚、



シヤイナルやウツナルが八十萬枚から百萬枚を發行して、桑港のやうな僅か三四十萬の人口を有する都會でも、エキザミナー、クロニツクル、コールの三新聞で各々平生七萬枚、日曜日は十萬枚位宛發行するといふとぢや

○デ米國人ほど新聞を好んで、新聞がなければ幾んど一日でも暮せぬといふ程な人間は、まア世界にも類ひが稀なそうぢや

### 第二十五 驚くべき新聞紙

○序に新聞の話を話そう、米國の新聞業は、其の完全して大規模なとは實に世界第一といふとだから、殊に記すも悪くはあるまい

○新聞記者が先づ一種の特權を持てる、卑近な事柄でいへば、火事場とか人殺しとか、非常線（フーリヤン）を張てある内でも、新聞記者に限つてズン／＼入込むと出来る、記者が兼て警察から渡されてある星の付いた徽章さへ持てれば、自由自在に其様處へ出入りも出来るし、又市街鐵道車なども無代で乗せるのが多い、鑄鐵では各州法律を異にしてるから、一概にい

えぬが、記者を無代又は半額で乗車させるのが多い、又或る鐵道會社では切符を手帳のやうに繫いだのを新聞社に贈つて、其れに乘車すべき社員の姓名と日附さへ書入すれば、ズン／＼普通客として扱ふのもある

○記者も米國流で貴賤などの差別を眼中に措かぬから、他國の王侯貴人が來たとしても聽かうものなら、直様遣て往て、服装などには一切無頓着で、無遠慮至極に思ふとを聞糺す、而して其の話は詰らぬとでも電報などで仰山に新聞へ出す、勿論お負けを附けたり、宜加減な作り事まで加へるといふ悪い癖が無いでは無いが、兎も角も素早いことには呆れる

○其れから斯様な記者は大抵繪も書けて速記も出来るので、相手が話



すのを聞ながら其の顔や様子を寫すといふ風ぢや

○新聞社の内部は如何にも整頓したもので、其の盛んなとも分る、電報は皆電信局から特別電線で取寄せるので、電報室には各々數名の技師が居る、此の技師にも、歐洲とか、北部とか、南部とか、中部とか、其れれ受持があつて、其の方面からの電報ばかり受付ける、始終カチカチ受つて受信してゐる具合は、極めて繁忙な電信局と一般である

○紐育ヘラルドなどは素ばらしいもので、大西洋に海底電線を布設して置いて、直接に歐洲から電報を取寄せてゐる、而して其の編輯部内にも桑港や、ヒラデルヒアの新聞支局室があつて、茲から其の新聞社へ電報するが、ヘラルドは斯うして多くの地方新聞へ電報を遣るから、海底電信ばかりでも儲かる位ぢやといふ評判もある

○編輯局には主筆室、電報室、校正室、繪畫室、寫真室、流行遊戯室、市事部記者室、夜記者室、日曜記者室、婦人記者室、参考室などがあつて、主筆は秘書

役の一二人も使つて堂々としたものだ、市事部の記者が一番多人数で市中の出来事は一切漏さず蒐集する、繪畫室には數人の畫工が詰めてゐる、流行遊戯記者は芝居諸觀世物や、衣服器具の流行、運動會などのとばかりを擔任するので、其れのみも中々大したもののである、夜記者は夜分の出来事を蒐集するので、地方行の新聞などを出したつた後、市中及び市附近へ配達すべき新聞へ最近の事實を加へるのが役ぢや(米國新聞は地方行、市中配達など、二三通りも作るの例だ)、日曜記者は日曜日の新聞ばかり作るのが役で、日曜日の新聞は彩色繪を入れて、頁數を増して慰さみにするやうな記事を多く入れる(其の代價も勿論平生のより高い)

○日本の新聞と比べて最も感心したのは、参考室と寫真挿入のとぢや、参考室といふのは大きな室の四方へ、漢方醫者の藥箒等のやうな筆筒をズツと並べて、其の引出し毎にイロハ順を附けて、其の内へ世界各国



の歴史、傳説から人物の肖像などまでを切抜いたのを入れて置く、其の係りの者が書籍、新聞、雜誌を涉獵して、之を切抜いて茲へ袋入れにして置いて、記者の方から例へば日本の黒田伯が死んだから、其の肖像と畧傳が欲しいと言て遣すと、直ぐに「この日本の部の「シ」の處を探して兼て切抜て置いた黒田伯の肖像傳記を渡すといふ風にする、至れり盡せりでないか

○寫眞術の應用も亦驚ろくべきもので、各新聞社とも發電氣を備へ付けて置て、寫眞室へ強力な電燈を點ける、普通の寫眞は申すまでもない、繪などでも書工に思ふまゝの大きさに描して、其れを好きな格好に寫眞へ撮て、件の強力な電燈で以て之を金屬板に焼付けて、其れを種々の藥水に浸すと、直ぐ印刷すべく金屬板へ彫刻されて出て來る、別に人手で彫刻するなどの面倒は無い、何でも寫眞器に掛けてから四十分の間に印刷器械へ掛けるとが出來るそうぢや

○其れで繪の出し方も迅速で、今曉一時の火事が其の朝六七時頃の新聞に寫眞入で載るといふ有様で、其の外多くの寫眞畫まで挿入される、器械の利用實に驚ろくべしである

○活版部には尙ほ巧妙な器械がある、廣告のやうな大小幾種の文字を用ふるには、無論活字を拾つたり、之を組んだりする手数は費るが、新聞紙の記事には左様な面倒はせぬ、職工が器械の上に現はれてる文字を指頭で押すと、銅の原字が飛出して並んで、熔解されて鉛を相手に Haku-bunkan とか、Shimbun とか一語を作して、原字は一個づゝ又元の場所へ戻る、鉛で新造された語は續々と側へ一語づゝ綴られて出る、實に世話も何もない、此の器械六七臺、職工六七人で以て數時間の中に優に大判の二十四五頁の新聞が出來る、其の器械の働らき恰かも鬼神の如しぢや

○印刷器械にも、一返刷ればかりで幾通りの色彩が出るのもある、此等



は日本の新聞では當分先づ眞似も出来ぬとであらう

○記者の報酬は他の事業に比べて割安ぢやといふが併し日本のなどは比較にもならぬ、普通探訪者のが一週間廿二三弗(四十五六圓)で、一月には我が二百圓以上になる、校正掛りが一週三十弗位ゐで、一ヶ月二百五十圓になる、桑港エキザミナーの主筆記者フロレンス氏すら月給ばかりが五百弗(我一千圓)で、我が内閣總理大臣殿よりも遙かに多い、又紐育ヘラルドのターナー氏は年俸二萬弗(我が四萬圓)リツク氏は一萬五千弗、ベボウス氏は一萬二千弗、又紐育ネオールドのコックリル氏は一萬五千弗を取てる

○斯様に精巧な器械を使つて、社員にも高い給料を支拂つて如何して新聞の經濟が立つか、僅か三仙(我が六錢)で三十幾頁の大新聞が買はれるやうでは、紙と印刷費ばかりでも引合はぬかと思はれる、多勢の記者、會計職工を使つたり、高い夥しい電報料まで拂つて、經濟の立たう理は

無いやうぢやが併しある、其れは廣告からの收入である

○新聞紙は前にいふたやうに、如何なる家にも購讀されて、米人の生活には缺く可らざる必需品となつてゐるから、廣告の効能も著るしいので、随つて廣告も驚ろく程多いし、廣告料も日本人から見れば驚ろく程高い、此の廣告料で以て新聞の經濟が立派に立て往て、多くの利益まであるのぢや

○新聞の利益の多いのは、紐育ヘラルドを見ても分る、主幹のターナー氏は佛國の巴里に常住して居て、大西洋を越えて紐育ヘラルドと、而して巴里で刊行する英文の『紐育ヘラルド』とを主宰してゐる上に、大西洋の海底電線も持てるし、去年英米の帆船競漕の有た時に、ヘラルドが一漁船を借切て之に伊太利から無線電信の發明者を聘して、海上の沖合遙かな處から競漕の結果を時々刻々ヘラルド本社へ報知させて、紐育全市をソツ／＼といはせたのみか、米國全洲を震動させるなど、到底莫大



な利益がなければ出来ぬとちや

○一日八十萬枚以上を賣出す紐育ウチールドに對し、之に劣らぬ大勢力を得たのは紐育ウチールドで、是に面白い話がある、ウチールドは元々微な新聞であつたのを、米國の銀鑛王といはれたハルスト氏が死んで、其の遺産が息子の手に入ると、息子先生當時大學から飛出したばかりな血氣時代で、不意と莫大な遺産が手に入つたのを幸ひ、ウチールドを買受た上、ウチールド新聞の記者中最も働らきのあるのを二倍以上五六倍までの大金を出して無理に雇ひ込んで、一ヶ年足らずの間に百萬弗から注入して盛んに遣り出し、ウチールド新聞と死物狂ひの競争して、是も今ではウチールド同様八十萬枚以上を賣り出すやうになつた、米國が西班牙と開戦したのも、此のウチールド新聞が大金を出して大統領マツキンレイ氏を非難した駐米西班牙公使の私書を手に入れて、之を新聞に載せて盛んに米人の排西思想を激發した結果ぢやとまで

いはれてる、一個の新聞が堂々たる國家を開戦せしめんとは、何とエライ勢いぢやなからうか

○英國は流石に新聞業も盛んで、佛國では巴里に二三エライのが有る、獨逸では丸でお話にならぬクチな新聞ばかりぢやといふとであるが、兎に角英米兩國は世界の二大新聞國で有て、而して一ヶ月の新聞發行高を較べると、米國が二億三千萬枚で、英國が一億五千萬枚ぢや

### 第二十六 芝居と寄席

○東京で芝居見物といへば、朝から夜分まで掛つて、晝食晩食は勿論、酒とか菓子とかを飲食までして、其れに茶屋への祝儀、男や婢への心付けなど、いつて少からぬ錢まで費すが、米國などでは決して其様な馬鹿氣たとは無い

○芝居は午後三時から五時まで、夜七時から九時乃至十時までと



か、何でも二時間か三時間で終るのが通例である。

○入費も唯だ席料を拂へば外に何も要ぬ。席料に幾階級もあつて最上等がボックスといつて別室に仕切られてある。平土間も後ろの方へ順次高くなつて居て、棧敷も二階、三階、四階、五階とある。見物に都合が宜い席が高く、悪い方が安いのは勿論である。其れから英國からでも有名なアーヴィンクとかいふ俳優が來て演るのだと、席料も中々高い。併し日本のよりは遙かに安い。席中所々に目鏡があつて、之を用ゐると其の借料を十仙位取られるので、此の外には一文も入らぬ。

○ボックスなどには無論椅子が有て、自由に動かせるが、棧敷か平土間のには、造り付けの椅子で、腰を掛ける所にパチがあつて、ボンと其れを叩いて、其の下面に朝を掛ける所があるから、男子は其處へ朝を藏めて、外套も脱で腰を掛けたまゝ、靜肅に控えてる。

○婦人は朝を脱でも脱がぬでも宜いとしてあるけれど、總て脱ぐ花や

鳥の羽などが嚴いほど房々と着いてる大きな帽子を被て居られては後の見物大困りであるからぢや、而して婦人は此の帽子を腰掛の底へ藏められぬから、銘々手に持つて居る。婦人は帽子を被てる時と、脱でる時とで、其の顔や髪が著るしく替つて見えるのが多い。

○芝居でも麥酒を呑むと煙草を吸ふと丈け許す所もあるが、其れは其れと定まつて居る處で、且つ至極少い。皆飲食禁制で、僅かに水を呑むものがある位に過ぎぬ。一同靜肅に見物してるから、満場恰かも水を打たる如くである。如何に下等な土方人足や何かでも、芝居では神妙に靜かに控えてるのは感心なものである。

○尤も至極可笑い處になると、ドツと笑ふともある。又幕が切れて俳優の引込む時、大に喝采するともあるが、日本の見物のやうに無暗に藝の巧拙をわめいたり、所謂大向ふで怒鳴るなどの馬鹿氣な無作法などは無い。



○其れから見物が喝采すると一旦引込んだ俳優も再び幕を掲げ出で、一統へ深々と禮をするのであるから最負俳優の顔を見たいと思ふと見物は二度も三度も拍手喝采するが併しそう幾度もしつこくは遣らぬ

○舞臺には花道が無い併し道具建が巧妙を極めて樹木草花皆實物の如くで大空河海深谷皆幾んど實際の如く見える其れには電氣を自在に使つて舞臺の向側の正面の機敷からや幕の後ろからや諸處方々から電氣を使つて明暗遠近の景を意のままに變化させる

○幕が上ると直ぐ見物席の電燈を消す是れは殊更に舞臺の方ばかり明白させるためで重なる俳優の際立たる見せ場所作や顔付などにも殊に電燈の光を茲へ集めて十分見物に示すといふ仕掛けで此等のは一點の遺憾もなく十二分に出来てる

○舞臺の直ぐ前の平土間には音楽隊が居て俳優の臺詞や所作に合せ奏樂する

○曾てシルレル作の『魔法博士』といふのを見物したが博士が魔術で樹木へ種々の花を咲かせたり戀しい乙女の心を誘ふため其の櫛や指輪から光りを放たせる時など一々電氣の作用で不思議な藝を見せたが結局乙女は半死して上天する博士は乙女を半から救ひ出さうとして術が破れて悪魔と共に大地へめり込んだが乙女が死して女神の膝を枕として昇天するさまなど電氣で以て漂渺たる天空を見せて神々しき有様で登天する處など如何にも廣大に見られた

○人を殺す芝居は勿論多いが日本のやうに酷たらしく殺したり血を出したりするとは無い

○『十八時間紐育一周』といふ外題の芝居があつた紐育の豪華繁盛な態を始め多くの美人が競ふて媚を札びら切る田舎大盡に呈しながら尙ほ時々若い美男に秋波を寄せるといふ人情の極端から紐育の暗黒界をも描して黒奴の戀争ひ黒奴特得の舞蹈下等社會の凶漢が無邪氣な



乙女を攫ふとから、掏賊の働き振をも見せ果ては美人幾十人が古代の粧ひして、般やかに踊る處まで、貧富盛衰有らゆる方面を寫したので、特に興ありげに覺えた。

○今二つばかり面白く感じた劇を左に話さう、初めのはシエクスピア作のハムレットである。

○第一幕が王城の衛士等が先王の幽霊が出るといふ評判をして互ひに不思議がる處へ、太子ハムレットの學友ホラシオが來て、同じく幽霊を見て驚ろく場。

○第二幕が宮城内の大廣間で太子ハムレットの伯父クロヂアス、太子の母后ゲルトルドと結婚の結果、クロヂアスが國王となつた披露が有て、ハムレットの幽愁を頻りと慰さめる、ハムレットは母后の言に従つて、獨逸大學へ入學すると丈けは見合せたが、尙ほ母后が父王死後未だ一月ならざるに、父王の兄弟と結婚した其の人情の輕浮を慷慨する。

やら、兼て父王を追懐するやらで、寸膺九廻する、一同が去てハムレット獨り自から悲嘆する所へ、學友ホラシオが來て幽霊の話をする、結局ハムレットも試みに其れを見やうといふことになる。

○第三幕は王城の門前で、ハムレットがホラシオや衛士を隨へて待てる、果して父王の幽霊が甲冑姿で出る、無言でハムレットを招くので、ハムレットが行うとすると、學友や衛士が頻と苦諫する、果てはハムレット拔劍して之を振放つて幽霊に隨つて入る。

○第四幕が宮内卿ポロニアス老人の邸で、其の長男レアルチーズが佛國へ旅行の門出に、妹のオヒリア姫と訣別して、姫とハムレット太子とが戀するのを、未遂げるとが覺束ないからとて、優しく姫を諫める、茲へ父の老人も出でて、兄を旅して尙ほ姫に太子とは口をも利など命令する。

○第五幕は太子ハムレットがオヒリア姫に會つて心の丈けを搔口説



く、姫も心弱くはあるが、父や兄の訓も考へる、太子の切なる情と己が懐  
ひに揺亂れて、果ては涙に泣倒れる、之をクロヂアス王が密かに覗くと  
いふ、凄婉な場ぢや

○第六幕はハムレットが我が伯父クロヂアスこそ父王を弑害して母  
后と不義の愆を恣にするのであらうと、父王の幽霊の告げなども考へ  
併せて疑ひ思ふ揚句、クロヂアスと母后とを招待して、一幕の芝居をお  
目に掛ける、其れは或る王が臥して居ると、后妃が来て種々に勞はる、后  
妃も王に媚を献して居たが、此の時后妃の情夫なる凶漢跳り入て王を  
害するといふ仕組で、ハムレットは恰かも狂人の如く装ふて傍若無人  
に振舞ながら、油断なく王クロヂアスと母后の様子に目を付けて居  
ると、王と母后とは怒りやら慚愧やらで匆忙に立去て仕舞ふ、是を見送  
るハムレットは借てこそ父の仇は伯父クロヂアスに極つたり、必らず  
復讐せんと決心して勇氣を振ひ起すといふ幕

○第七幕王城の寢室へも尙ほ先王の幽霊が出て、母后等を惱ます、深更  
ハムレットが七首を懐ろにして来て、母后の不義を泣き且つ怒つて諫  
める、母后も泣く、ハムレットは一室の内に伯父ありと七首を閃かして  
突入して、一刺にクサと之を殺して引出して見ると、何ぞ圖らん、怨み重  
なる王にはあらず、戀せるオリヒア姫の父ならんとは、太子七首を抛つ  
て不運を嘆ずる

○戀人の太子に過失とはいひながら、父を殺されて、今や太子とは恰か  
も仇敵の地位に立たオヒリア姫は、戀を遂れば孝成らず、孝ならんどうす  
れば戀遂げずで、思案の餘り、憐れにも發狂して、悲しげな戀歌に花を散  
いて見るに忍びぬ有様となる、母后は頻りに勞るが効が無い、太子出で  
涙ながら姫を介抱するけれど、姫は言笑常を失して太子たるを辨え  
ぬ、併し太子の切なる言に氣が付いてか、ハツと驚ろくと共に絶叫し去  
つて一躍池中に投じて死ぬ、母后驚ろいて救ひ揚げたが既に遅しとい



ふのが第八幕である  
○第九幕二人の土方が墓穴を掘り種々の名文句で滑稽を遣る茲へ太子ハムレット學友ホラシオと來掛つてオリヒア姫を葬むるの旨やと聞いて外所ながら會葬しやうと待てる處へオヒリア姫の棺を送る王クロヂアス母后ゲルトルードが多くに従者を従へ亡き姫の兄レアルチーズも來て、姫の遺骸を穴へ卸してレアルチーズが哀悼の演説する、ハムレットも出で、一掬の土を手向やうとすると佛國から歸て未だ間のないレアルチーズは父を殺され妹姫を亡したのも皆太子の故と、悲みの餘り氣も坐るに怒り立て、太子と争ふ、斯くと見し伯父クロヂアス王は奇貨措くべし以て太子を亡ぼすべしとの心を色にも出さず、然として双方を宥め、太子は亡姫との戀もあれば手向を終るべし、但しレアルチーズどの怨みを解くため潔く決闘すべしとて、己れ其の介添人となつて期日を定める

○第十幕先王の石像のある所を決闘の場と定めて、太子ハムレットはホラシオを隨へて出る、クロヂアス及び母后も出る、レアルチーズもクロヂアスから劍を受けて、イザと立合ふ、初めハムレット胸に一刀を受け、けたが奮つて相手の劍を叩き落して、ワザと己れの劍をレアルチーズに與へて、落ちた劍を拾つて持つた、是れは自分で疵を見て、刀尖に毒藥が塗てあるのを知り、彌よ伯父クロヂアスの奸謀を察したから、茲に併せて伯父を討つて父王の仇を復そうと決心したのである、丁々發矢と切結ぶ内、到頭相手のレアルチーズを倒すと、伯父は太子の勇を賞へて一盃の水を侑める、其れは毒藥であるから、斯くと察した母后は突然之を奪つて自から吞下すや否や斃れる、之を見るとハムレットの怒り心頭に發して、支ふる衛士を物ともせず、獅子奮迅の勇を振つて先王の像下に奸魁クロヂアスを斬倒して、我が目的達せりと安心しながら、最初の毒の廻つたため、ホラシオの手を握つたまま、先王の像下に瞑目して全



局を終るといふ悲劇である

○今一ツは其の外題も何も角も忘れて仕舞つたけれど筋が極めて面白く出来て居て米國でも近年の傑作といはれて紐育ばかりでも五日も續けて興行したのである

○第一幕裕かな百姓の屋後で主人の老翁頭丈ながら極めて質撲で慈悲深げに多くの農夫が節面白聲可笑しく農歌を唱えつれて麥を搗てる處で、田園の景趣掬すべしである、茲へ若い見すばらしい男が来て、老翁此の劇の主人公へ錢を呉れいと哀求する、老翁は彼が呑だくれの揚句と聞いて、我れ亦年比の一子があつて、矢張酒のため身を過つて家出して、今那邊に在るか、晝夜心配の絶間が無い卿も老つた母上があるといへば、心を入替て働きなさい、母に麵包すら與るとが出来ぬとは何たる不心得ぢやと、懇々説得の上、錢を遣る、若い男は其の貰つたのを見ると五弗の紙幣であるから、驚喜して生來始めて斯る紙幣を見て、老翁の

音に感じて屹度心を持替て、立派な者になつてお目に掛ると誓つて去る

○第二幕紐育のホテルの應接室で、何から何まで華奢贅澤を極めて燕尾服の紳士や、花の如く粧ふた美人が談笑献酬して居る處へ、件の老農翁が泊り込んで、其の華奢なのを見て、事毎に驚ろき呆れ、フツクリした厚綿の椅子へ腰掛けて、身が埋まるやうになるので、喚驚して跳返るやら、種々な可笑味がある、と、翁が一室へ入た跡で、紳士婦人等が花やかに舞踏を初める、其の唱歌の中に「ハイヤ〜(火〜)〜といふのがあると、老農翁泥だらけな長靴とズツクの古ぼけたカパンを引摺つて、寐衣のまま、一生懸命に飛出す、一同肝を潰して仔細を聞く、フハイヤ〜といふから火事と思つて、スッ大變と飛び出したのぢやといふので、一同大笑ひに笑ひこける

○第三幕老農翁がブロードウヰの會堂邊を逍遙すると、同じ村から



出た菓物賣の山の神が来て大聲で話しながら分れる、兵隊が来る、赤十字社員が来るので、見る毎に老農翁膽ばかり潰してマゴクして居る、竟に書面を郵便函へ投げ入れて、是れで如何して我が居村まで届くのかと不思議に思つて、千思萬考してると、丁度郵便集配人が来て、鍵で函の蓋を明けて、郵便物を袋へ入れて去ろうとする、老農翁はドッコイ俵つたり、泥坊殿、何で我が手紙などを盗むのぢやと喰て掛る、氣早の郵便屋は腹立つて突然拳固で翁の横面へ參る、翁も怒つて取組合ふ騒ぎの處へ巡査が来て、譯を糺すと互ひに眞ッ赤になつて喋々する、巡査は腹を抱へて老農翁を諭して、懇ろに郵便集配の手續方法を説明すと、老翁手を拍てナル程と感心する、實に質撲の態描し得て妙ぢや、次に老翁が家出した息子の事を考へて、悄然と歩いてると、立派なシクルハツトの紳士が来て、行違ひさま恭々しく挨拶する、翁はクマンな顔で、其様立派な人は知らぬといふと、紳士は手前こそ先年五弗の紙幣を頂戴し

た者で、御蔭で心を入替たため、幸ひ今の身の上となつたので、一日片時も御恩を忘れるとは無いと、此の再會を嬉し悦ぶ、翁も満悦の眸で、問はるゝまゝ、放蕩息子、の行衛を探すと、話すと、紳士は細かに其の人相などを聞いて、多分紐育に居られるだろうから、屹度探し出して、お目に掛けると、約して立別れる、局面一變して、一個の泥酔客、踏々、と飛出すと、巡査は公道に泥酔する者は罰金か禁錮ぢやと、規則を勵行して、拘引しやうとする處へ、前のシルクハットの紳士が来て、熟く、醉客を見るど、襤褸を纏ふて、宛然乞巧のやうであるが、人相は老翁の子に相違ないので、偕てはと思入あつて、密かに巡査に紙幣を握らせて、此の男を救つて、父の心配のとなど話して、伴て去る、其の途中へ、丁度老翁が来たので、紳士が引合はせると、ヤレ懐かしい息子かど、涙ながら抱き寄せる、息子も慚愧後悔して、泣伏すを、老翁も其の上へ泣伏すといふ親子の至情、思はず見物のハンカチーフを濕さす



○第四幕は冬季老農翁家内の躰で、作男やお針の婦人が居て、作男同士で互ひにお針殿へ「ハイノ」を極める、其の内主翁主婦も出て、彌よ先年救つた紳士と息子が改心して歸つて來るといつて悦んで、農家の温たかなホームの様子見るから嬉しげぢや、竟に男共を促がして雪中御苦勞ながら薪や穀物を受持く、に始末せいと言令て入る、作男どもは言令通りにして歸つて、又頻りとお針殿へ戀争ひの角突合ひを始め、小僧小女も出て作男共を馬鹿にする、作男怒つて箒で立廻るなど、自分の滑稽でドツと笑はせる、茲で幕を落すと一面の銀世界で、チラ／＼雪の降る夜に、遙か林間の家で燈光が窓を漏れる具合、インと繪畫のやうで妙言ふばかり無しぢや、茲へ健馬に櫛を牽かせて紳士と老翁の息子が乗て家路を指して歸て來る、又元の家内へ戻つて、紳士と息子が雪を掃つて入ると、老翁夫婦も家内の男女も喜びさゝめき迎える、和氣霽然たる處へ近所の誰彼、神さん達や娘まで大勢來て、めでたし／＼と一

同舞踏に賑々しく結局する  
○寄席といつても、日本のやうにしみツたれで、吹けば飛ぶやうなのは無い、結構は芝居の坐と少しも違はぬ、併し幾分か小さいから、隨つて席料も安いが見物の禮儀を守つて靜肅にしてるとなど、些も芝居と違はぬ  
○寄席でする藝は話家然たる男の洒落や地口を始め、美人の唱歌、手踊、黒奴の歌と踊、道化又は普通の芝居、一二幕輕業、ボクシング(拳で突合ふ)の活動寫真など、幾種も／＼演るが芝居よりも却つて面白い位ぢや  
○芝居でも寄席でも、日曜日は平生より席料を安くする、是は幕敷を減して、而して職工、僕婦などに見物させるためぢやそうナ  
○芝居でも寄席でも、席へ案内する男は、總て燕尾服で、丁寧に一々客を導いて、其の入場札、席料を拂つた時渡す切符ぢや)にある番號と、席の番號とを照し合せて客を席へ着かせる







遅起で、其れで、寺詣りをするから、全く朝飯を喰はぬのも多い、晩には茶と、シャム、ピスケットに菓子位ゐで済すから、馴た米人には宜からうが、我々日本人には幾んど辛抱が出来ぬ程ぢや

○水曜日の晩は、婦人が多く出掛けるので、町々は大きに般ふ、土曜日も左様で、此の兩晩は家に在ても、カルタをするとか、音楽を奏するとかで、家内團樂して遊ぶのが例ぢや

○日曜日は朝が寺詣りで、其れから訪問に廻るのが多い、家に居ても唯だ静かに安息する丈けで、カルタを弄んで般かに遊ぶなど、いふとは無い

○金曜日には一度必らず何か魚肉を喰ふのが多いが、是は昔しカドリツシ宗の風ぢやとかいふ、今は新宗でも何宗のもので、金曜日には魚肉を用ゐるそうである

○米人は英國人と共に世界一の口を奢る國民で、殊に米國では肉穀物

菓物、野菜の産出が豊かであるから、食物に贅澤なとも亦甚だしいといはれてゐるが、實際は右の爲躰である、思ツたよりも儉約でないか、併し是は紐育邊で中等社會のとである

○毎日午後には婦人も公園か町かへ必らず散歩に出掛けるといふ風で、小供などは、自轉車に乗るとか、冬は氷漕りをするとか、女子でも平生靴の底へ車を着けて其れで人道の滑かな處を漕り廻るなど、中々活潑に運動する

○今一ツ儉約のことを述べよう、大抵な家には下婢の一人位ゐ使ふけれど、臺所の料理や洗濯などは主婦とか娘とかが引受けて、下婢に手傳はせる位ゐるもので、女子は幼時から料理法、家事、經濟法などを傳習する、飲食用の買物でも、婦人が自身にサツと八百屋へでも肉屋へでも穀屋へでも出掛けて往て、品の宜い價の割安なのを買て來る、何事も幾んどん任せで、品物も見ずに肴屋や八百屋の御用聞から取寄せる東



京流の婦人方とは丸で行方が違つてゐる、食物は人間の活力を生ずる原料であるから成るべく滋養のある宜いのを擇んで、而かも經濟的に遣るのが賢明な婦人のすべきとて、米國婦人などは卑いどころか誠に見上げたものである。日本の奥様や御嬢様が八百屋の店前へ立ち居るのは外聞が悪いなど仰しやるのは甚だしい御心得違ひである。

○其れから又冗な費を惜むの念が甚だ強い、夜中など必要も無いのに瓦斯燈を消し忘れるとか、餘計な燈明を點て置くなどいへば、其れはそれは喧しく非難する、少しでも冗などをしては神に濟まぬと謂てゐる、所謂天物を暴殄せぬので、節儉の神髓を得たものであらう。

○夫婦の間柄は勿論一夫一婦で、妾などいふものは鐵の靴で探し廻つても無い、家族の快樂が實に重んじ貴ばれて、男子が營々役々として外で働らくのも、實に之がためとしてある、夫婦親子皆此の家族の團樂したる快樂を圓滿にしゃうくと勤める、其れで夫婦親子の間自から

愛情あり、秩序あり、禮法ありといふ風ぢや

○老人を尊ぶのは日本と替る所が無い、又子供をも決して輕んずるなどいふとが無く、幾んど大人同様に扱ふ、是は實に感ずべきとて平等といふのも恐らくは是れであらう

○而して各々自個の權利を尊ぶの念が強く、女子でも十八歳以上で、獨立の意思を持つとなれば、各々自室を有して、一旦戸に錠を掛した上は、親と雖も承諾なしには恣に入るとが出来ぬ、又小供でも、銘々手函などを所有して、玩具器でも何でも之に仕舞込んで思ふままに扱ふと、共に自分の物は自分で始末する、親でも兄弟でも、少しでも之を犯すと容さぬといふ風ぢや、此等も生れ立から自然獨立の思想を養成する、基となるのであらう

○夫婦や同胞間の愛情は又格別で、夫婦の執れか一方が旅行でもする、幾んど毎日のやうに手紙を認めて往返する、左様く書く事柄がな



からうと思ふと、今日は天氣が宜いとか、犬が吠えたとか、猫が噓したとかいふ詰らぬとまで書込んで贈遺するのぢや、其の愛情は實に濃なもので無いか

○各々音樂の嗜みがあつて、大抵な家にピアノやオルガンが有て、家族時々弾じ且つ歌ふて楽しむ

○併し總て物價が高いから、主人公たるものゝ心配は一通りでない、而して婦人も亦如何にして節儉すべきか、如何にして表面にポロを出さず、流行にも後れずに立派に暮し行くべきかと、其の苦心すると並々ではない

○子供の教育には心を用ふるとが深く、大中小の學校へは努めて上げる、女子でも中學校までは必らず卒業させるといふ風ぢや、其れで女子の道理に敏いなどは、實に敬服すべき程である、家庭教育も厳しく、運動の注意から、行儀作法の仕付け、苟くも自墮落な風を許さぬなど、

一々範とすべきとが多い

○子供も苟くも受くべき學校教育を受けた以上、何か志す所の事業を求めてサツ／＼と遣て往て、何時までも親の厄介になつてゐるなど、いふとが無い、如何に富豪の息子でも、皆一本立ちで、自分の働らきで身を立てる、日本の若旦那は即ち馬鹿旦那で、親のお蔭でデレリとして暮すが、米國の若旦那には決してこんなことは無い、此等は實に日本と著るしい相違である

### 第二十八 職務に働き振り

○米人がピソチス即ち職務といふものを重んずるとは非常である

○上に立つものでも、日本ならば社長など、いッても碌々仕事をせず、大抵人任せにして置きながら、唯だ下僚の隙ばかりに氣を留めるのもあるが、斯様馬鹿氣たものは米國に無い、職務と私事とは判然と別て



置いて役の重い者程能く働らくし、又職務以外ならば僅かなとにでも決して人を使はぬし、又使はれぬもせぬ

○執職中こそは役々によつて権限にも等級にも差別があるが、其れが濟んで一私人の資格になると、自由平等で貴賤上下などの差別はない其のチャンと定つてゐるのは實に小氣味の宜い程である

○秩序を重んずるとが非常で、上役の命令なら如何に無理と思つても柔順に服従する、ヒラデルヒアの造船所で、技師が千辛萬苦して船の設計を立て、之を圖にして技師長へ見せると、技師長は一見して『往けぬ』といつた切り、何處が悪いとも何ともいはずに別に又設計を命じた、技師は遺恨遣る方なく、思はず其の設計圖をズタ／＼に裂いたが、併し何もいはずに又命令通り設計をしたといふのである、上役が下役を指揮するとは、恰かも士官が號令するやうな調子合で、下僚の之を奉ずると亦恪勤誠實なる兵士の如くである、名にし負ふ自由國の人間で、斯くまで職務を取るに柔順に、而して執務の仕方が斯くまでに壓制的であらうとは、實に意外に思はる

○職務を執るに、執れも一心不乱で、而して自家の職分以外には、一切心も留めぬ目も呉れぬといふ有様である、故に鐵道會社などで、運輸方

就て、運輸の仕方でも問ふものなら、其れこそ何から何まで、能くも斯う覺えてると思ふ程綿密に説明して呉れるが、會社の資本や純益や收支が如何かなど聞けば、一切知らぬといふ風ぢや

○其れは自己の職分以外に、如何なとがあらうが、トソと頓着もせぬ、又同僚に如何なる愚物があらうとも、其れにも更にお構ひなしぢや、愚物と同じ扱ひを受けて居て、不平でないかと質問すれば、上役も滿更馬鹿でないから、何れ其の内に愚物の愚を見抜いて何とか處分するであらう、なかに別に構ふとはないと、平氣に安心して居る

○若し日本人ならば、己れが職分以外のとにまで入らざる氣を廻して、



容隊したり、喋々意見などを立て、そして肝腎な自分の本務は却つて等閑にするのが癖ぢや、若し同僚が愚物で居ながら自分より地位が少し上とか、手當が宜いとかいへば、又不平でブウ／＼喧しくいふであらう、而して自然其の本分を忽せにするやうにならう、米人の仕方とは全く反對である

○何事も分業法で専門で行くので、自己の職務上の事柄といへば實に人間業と思へぬまでに熟練もすれば通曉もして、到底他人では真似の出来ぬまてになる

○一心不乱に勉強するから、萬事手早く掛ぶし、其れに誰でも悠々とはして居ぬ、商賣の取引でも何でも職務上の對談は大抵立ちながら談判するといふ風で、椅子になど腰掛けて悠然構ひ込むやうなものが無い

○其れから職務に關する器械が能く整つてるとも驚ろく程である、ヒラデルヒアの我が日本名譽領事を訪ふた時のものであるが、領事は紹介

狀を認めさせて上げやうといつて、火吹竹のやうな器械へ口を當て、手紙の文句を話し込んで、其れをタイプライターに遣た、タイプライターの男は此の器械をタイプライト臺の處で明けると、領事の話が一々明瞭に聞えるから、其の通りタイプライトで文字を刷て出す、茲へ領事が自分の名文け書入れて、其れで一通の手紙が出来た

○會社などの重役の机を見ると、澤山な引出もある、細かな澤山な棚もあつて、倫敦伯林とか所に依て往復書を分類して藏ふやうになつて、何でも執務に必要な器械一式揃はぬのは無い、其れで上を引いてギユと蓋をする、總ての引出にまで一度に錠が卸るといふ具合で、机までが器械的に巧妙に出来てる

○取引所などの出来直を一々電話で聞くのも面倒ぢやといふので、一ツの器械を据付けて置く、電氣の作用で、取引所の毎節の出来直は勿論、世界の重なる市場から其の取引所へ來る電報までが、其の器械に顯



はれる、便利重寶此の上もない器械ぢやが、其れで一ヶ月の使用料僅かに三十弗(我が六十圓)とは安いぢやないか  
○一寸したとであるが、尙ほ執務振りの一端が分らう、トいふのは、通勤するに、普通身分に相當した服装をするけれど、事務室へ入ると直ぐに上衣を脱いで、仕事服に着替える、仕事服は輕便で古ぼけた、處々裂けたので、之を仕舞て置く小棚もあるといふ具合ぢや

### 第二十九 婦人の権力と職業

○米國風は女尊男卑で、婦人の権力は素ばらしいものぢや、道を歩くにも、男は車道の方に寄つて外側を歩いて、婦人に内側を譲らねばならぬ、男同志で挨拶するには、脱帽などせず、握手で済す、脱帽すれば寧ろ笑はれる方ぢやが、婦人に對しては恭々しく脱帽せねばならぬ、婦人に物を言ふにも亦然りである

○日本ならば女と同行して總ての拂ひを男が指圖して女に拂はせるといふ風ぢやが、米國では車代から何か何まで一切野郎の支拂ひ且つ負擔で、婦人から御同行などを仰せ出されると、一寸難有いやぢやが、其の實財布の神大迷惑である、お負に車に乗るにも、下りるにも、又梯子段を昇降するにも、一々女を先にしたり介抱せねばならぬので、繁文褥禮も當ならぬ程ぢや

○乗合ひの車に乗ると、婦人に席を譲るのが習慣で、若し一の空席もない所へ婦人が來ると、男子は直ぐと起上つて自席を譲るが、其の又譲るにも野郎の方で帽子まで脱いで、サア何卒此方へ御掛け下さいと御願ひ申し上げるのぢや、尤も勤め歸りなどの身で、長い間車中へ立ち通しでは苦しいと思ふ時は、野郎一生の智慧袋を絞つて、一心不亂に新聞を讀んで、婦人が眼前で皮綱にブラ下つてるのも知らぬ振りで済すなどいふともある



○併し紐育丈けでは、市街車の中で婦人に席を譲らぬでも宜いといふ除外禮があつて、田舎から紐育見物に出掛ける者へ、殊に此の事を言て聞かせる程だといふ、尤も紐育でも矢張婦人に席を譲るのが紳士の作法としてあつて、自席を譲るのが多い、但だ他の市府程で無い丈けぢや、是で日本人に面白い話がある、老婦人などに席を譲るのは宜いが、年若で嫌にオツゝ濟した婦人が、此方で恭々しく米國流の紳士は是でムいといはぬばかり席を譲るのを、一言の挨拶もなくムズと腰掛けたので、日本先生思々しくなつて、一寸席へ忘れ物を致しましたといつて、其の婦人の起上るを俟つて入替つて、其處へドツかと腰を卸すが早いか、早く新聞を引げてサツ／＼と読み掛けて知らぬ顔で濟して、其れで其の婦人に復讐したといふとぢや

○英國では貴女といはるゝ者の資格に制限があるそうぢやが、米國のは婢でなく、女工か何かでなく、獨立してゐる婦人なら、總てレデイといふ

とになつてゐる、まア女といふ所を大抵レデイと言ふ風である

○年頃の男子が皆自分の働きで一本立となる如くに、婦人も亦何か職業を求めて獨立する、故に婦人の職を執てるのが驚ろく程夥しい

○彼の勸工場、大勸工場などの澤山な賣子は皆婦人で、一見恰かも美人雲の如しといふ風である、又各商店、ホテル、其の他の勘定方や、電話掛、郵便掛りなどは皆幾んど婦人のみの受持のやうである

○何處でもタイプライターは婦人の一手專賣といふ風で、是には美しい装をして、品格も立派な婦人があるが、大抵然るべき地位財産のある人の令嬢であるげナ

○桑港のライアン嬢といふのは、銀行の書記長を勤めて、一ヶ月三百弗(我が六百圓も)俸給を取るといふとぢや

○新聞記者にも殊に婦人が多くて、婦人の會合などいへば、必らず婦人記者が来て、其の景況を目撃したり、演説を速記するのが例で、流行掛



り記者などは幾んど婦人の専門となつてゐる

○有名なミス、マリーケスは故らに狂人の真似をして街上を狂ひ廻つて、瘋癲病院に入れられて、多くの患者が虐待酷遇される事實を巨細に見届けた上、辛くも茲を逃げ出して、病院の内幕を新聞紙上へ評き立て、大に輿論を動かし、其の病院に大改革を行はせたとある。パスカル嬢は又萬死を冒して紐育の大魔窟といはれるテンダーロイン街に入込んで悪漢凶徒の振舞、罪惡の狀態を明細に新聞紙へ出して、一代の公憤を起したともある。又新聞の投書家でミラー夫人(衣服通)、クロリー夫人(流行通)、ハーランド嬢(料理通)などは名を米國中へ知られて、其の原稿料の収入も大したもののであるそうぢや

### 第三十 自由國の下男下女

○職務を重んずるとが太だしくて、能く其の分を守る代りに、分外の事は決してせぬ、此の習癖は下男下女にもあつて、日本などとは太だしい差異がある

○日本で下婢といへば、炊事掃除方は申すまでもなく、大抵な使ひもすれば、寢具の揚卸しから針仕事までさせられる。而して雇はれるとき何と何を勤めるなどといふ約束を明白と定めて置かぬから、其の勤める仕事にも幾んど際限が無いやうで、唯だ働らきのある主婦か、小人数の家内ならば、樂で主婦が自墮落であつて、家内が多人數とあれば、下婢先生大弱りといふ風であるのぢや

○トコロが米國では、傭はれる時からキッチンと約束を固めて、何處の室、玄關、廊下などの掃除と、臺所の仕末、料理方の手傳といふ約定なら、此の外の事は何一ツせぬ、一寸買物して呉れいといつても、下婢の好意付なら知らぬ事、左もなければ雇主から命令もせねば、下婢先生亦往きもせぬ、何でも約束した仕事は、十分の責任を負ふて勤めるけれど、



其れ以外な事は決してせず、自分の室に籠城して其の自由を保つので  
 ○下男奉公するものも亦然り、外廻りの掃除とか來客の送迎とかが  
 約束の勤めである、其れ丈けはみしく働いて能く勤めるが外の事  
 には手も付けぬ、故に日本の書生などで僕に住込んで餘暇で勉學する  
 ものもある、日本のやうに玄關番の書生といつても、且那の靴磨き、走り  
 使ひ、坊ちゃん、がたの學校の送り迎ひから子守までさせられて、格別目  
 の廻る程忙しくはないが、其の代り勤める時間に制限がないため、朝か  
 ら晩まで自分の躰が自由になるといふと、無くて學問も十分出來ぬ  
 といふが如きとが無いげな  
 ○總じて日本の下女下男は勤め向きに明白した定めがない、米國の  
 は勤めるに骨の折れて目の廻る程忙しいとはあるが、其れを濟へば跡  
 が自由であるから、日本のやうに自分で自由の時間を持たぬといふ

が如きとが無い  
 ○日本の書生で或る學校長の家へ奉公してゐるのが有る、役目は家の掃  
 除と主婦が臺所働きを一寸手傳ふ丈けであつて、其れさへ濟めば家に  
 居やうと外へ出て遊ばうと自由自在で、主人からは何等の容喩も干渉  
 もせぬ、若し自分で序でぢやから主人の郵便も出して上げやうかなど  
 いへば、主人は「然らば之を投函して貰ふ、誠に難有う」などと、禮を言つ  
 て、丸で他人にでも事を頼むといふ風である、さうぢや  
 ○成程下男下女といつても、只普通の傭人は人で、決して臣ではない、雇  
 主被雇主の關係で、主従の關係でない、職務を取除ければ互ひに自由  
 平等の人間であるから、總て對等に行くのぢやろう、流石は自由國のお  
 國振ぢや  
 ○下婢は通例日曜日に休暇を取る、此の日になると、下婢先生大め  
 かしにめかし込んで、大手を振つて濟して出掛ける、下男も亦然りぢや



○前にいつた通り芝居でも寄席でも、日曜日は入場料を極々安くして、下男下女方の見物に供する仕組であるから、下男下女の優待法は自然に備はつてるといつても宜い

○併し米人は賃錢が高くて、下女下男に拂底であるから中々我儘を言張るのが多い、此の内は主婦が口矢釜しいとか食物がまづいとか、兼所が悪いとか己が居室が暗いとか、太だしいのは飼犬の面付が氣に喰はぬなどといふのも有て、イヤ其の雇ひ方は面倒至極なさうナ

○其れで下女でも下男でも、黒奴が多いが、そうく黒もないから矢張白人の下女も中々に見掛ける、黒奴には男女とも腋臭の激しいのが多い尤も米國婦人は幾んど十中の五六人は腋臭のやうで、其の悪臭を胡魔化そうとして、芬々香水などを香はせる、香水の匂ひと腋臭の臭氣が混同して、イヤ何とも言ぬ悪臭がする、或は之を好んで、其の匂ひがせぬと女らしく無いなどといふ者もあるが、太だしいのは其の室から諸道

具にまで臭が傳つてゐる、而して黒奴の男女とも此の腋臭が一層太だしく激しい

### 第三十一 神聖なる労働者

○「労働は神聖なり」といふのが、米人の間に行はれてる格言である

○成程拓くべき富源が多い、興すべき事業も多いが、何分にも人力が足らぬ、其れで労働が極めて尊いのだや

○且つ亞米利加の建國からいつても、最初歐洲の本國で失意で、政治上の自由を奪はれたとか、社會組織に不平があるとか、或は諸種の事業に失敗したとかいつて渡航し來つたものや、本國では到底思はしい見込がないといふので、先づ辛抱して少しの金を貯めて、其れを旅費として兎も角渡航し來たものばかりで、謂はれ、孰れも赤手空拳であつたのだ、其れが赤手空拳を揮つて、労働して、滿地の遺利を拾ひ上げて、家も成せ



は國も成すといふ順序で、竟に今の北亞米利加合衆國といふものが出来上つたので、今の米人の祖先であつた建國者は、皆労働者であつたのぢや、而して今日も尚ほ勞力が最も必要であるから、「労働は神聖なり」といふのも無理ではない

○労働者の地位は中々高い、總て職業に貴賤なし、貴賤は人物品性の高下、智徳の深淺多寡にあるといふのが米人の流儀で、靴屋の職人でも、相當の紳士淑女と交際して居る、自分が靴職人ぢやといふとを少しも恥とせぬのみか、寧ろ其の職のあるのを誇りとする位ぢや

○日本では、官吏とか會社員とか、文筆に衣食するものとかを貴しとし、靴屋の職人如きを、職人風情などといつて卑しむから、米國の男女交際の間で、或る婦人から一人の男が紹介されて、其の男が其の身分を問はれて、拙者は靴を製造するもので、ムると打出した時は、一寸驚ろいた、而して他の紳士淑女が彼れと談笑して聊かも隔ての無いのを見て、惟

んだが、併し惟しんだり驚ろいたりするのが間違ゐで、其の男が紳士の作法を守る以上、親しく交際して互ひに高下の隔てなどをせぬが、至當の道理ぢや、何も靴屋だからといつて卑い理は無いのぢや、流石は米國風と考へ直して酷く感心したとも有つた

○労働者の労働は實に激しいものぢや、一日大抵九時間乃至十時間で、其れで晝飯に一寸休むだけで、日本のやうに時々煙草休みといつては、悠々として煙草を吹かしたり、盆槍と薄のろくデレ／＼するやうなとが無い、此の一點になると日本人は逆も眞似も出来ぬ位ぢや、蓋し體格も大きく、氣根も強い結果であらう

○併し労働が激しいだけに、其の賃錢も中々高い、大抵一日二弗、我が四圓から二弗五十仙、我が五圓で、少し専門の腕前があると、三弗以上五弗(五弗は我が十圓)まで取るのである

○極められた時間の外は幾んど一分たりとも働かぬ、若し働けば其れ



丈けの賃錢を要求する是れは職工ばかりでなく、會社員などでも幾んど大抵斯ういふ風ぢやそうナ

○且つ會社によつては、労働者に高給を與ふる外に、家屋をも無代で借したり、其の子女の教育や遊戯運動などにまで、注意して便宜と利益とを與へるのもある

○而して市街鐵道諸車は労働者に限つて其の乗賃を半額(米國を通じて二仙五厘)として置く定めぢや、是ればかりでも労働者の優待されることが分るであらう

○労働者の生活といつても、そうく下等では無い、現に彼等の妻でも、相當の流行服を着て、十分めかし込んで往くときなど、何處の奥襟かと思はれる程である、日本のこやうに裏店の山の神然たるものも固より無いでは無いが、併し其れは寧ろ少い方であつて、大抵は相應に立派に暮して往く

○市街鐵道車の中などで立派にめかした婦人の隣りへインキや泥に塗れて汚ない姿をした土方人足の腰掛けてるとがあるけれど、婦人伴は平氣で嫌な顔一ツせぬ汚ひ方では無論遠慮するのが例であるが、併し他からは汚いといつて少しでも之を卑めるなどいふ氣風は決して無い、何處までも『労働は神聖なり』として居る

○職工安息日といふのがあつて、其の日は米國一般の休みで、銀行會社から官廳までも休業するのが例ぢや

○労働者の労働が激しい上に、器械の取扱方が危険ぢやからでもある、片輪の者が極めて多い、片足が亡どか腕が曲つてるとか、其れが往來で見掛けるとの多いのは、日本などで類の無い處ぢや、米人は我が外科治療法が進歩してから、性我人を殺さず、に活かす結果ぢやなどと誇るが、孰も労働者の性我したので、雇主からは多くの手當と終身年金を貰つてるのであるといふ



○太平洋沿岸のカリフォルニアとか、アシントンなどの州では、畑作やの、菓物摘取ちやの、鐵道工夫などに日本人の労働者を需要する者が多いが、是は一日大抵一弗から、一弗廿五仙乃至一弗五十仙、我三四の賃錢である、是に雇はれる日本人には種々の苦情がある、若し監理者其の人を得て、而して労働者自身も亦十分注意して掛つたら、將來随分有益な仕事であらうと思はれる、是にはいろいろ言ひたいともあるから、何れ機会を俟つて述べてみやう

### 第三十二 郵便と電信

○米國內地及びメキシコ、加奈陀丈けへは葉書が一仙(我が二錢)封書が二仙で、外國行の葉書は二仙封書は五仙(我が十錢)である  
○葉書や切手は大抵賣藥屋で賣てる、郵便函は日本のと違つて、辻々へ小さな鐵の函を出して置く、新聞や雜誌などの束の大きなのは其の穴

へ入らぬから、函の上に載せて置く、取集人が来て持て行く、往來の人は決して之を盗るなどといふとが無い

○郵便取集人は、馬車を率いて来て、郵便物を函から出しては順次集めて往くが、其の馬は往く先を知て、取集人が未だ甲の函を開てる内、早や先の乙の函の處へ往てるといふ風で、馬の伶俐なものと柔順なのは驚ろく程ぢや

○郵便配達人は、ズツクや皮の大きなカバンに郵便物を入れて配達する。受取人の家の前へ來ると笛を鳴らして家内に注意して置いて、郵便物を窓へなど挿んで往くが、其の歩き振りも米國風に早くなく、又日本のこやうにも急がずに悠々たるのは頗ぶる意外ぢや

○其れから郵便物の集配度數も日本のほどに頻繁では無い、同じ紐育市内でも、午前に出した郵便なら、午後には先方(矢張市内)へ届くが、午後に出したのは其の日の中に届くとが少い。大抵翌朝届くのが例ぢや



○我が東京などに較べると、其の遅い「夥しい、恠んで聞くと、米人は濟して曰く『郵便の早いのは文明國でありませぬ、文明國人は郵便などを用を達さず、皆電報でサツ』と辨ずる、郵便などはまア無沙汰見舞か、要でもない音信を通ずるに用ふる丈けです」と成程御尤もぢや

○去れば電報の早いとは又意外ぢや、電信は日本の如く官業でなく、民間私人の事業であるから、會社々々で競争して、互ひに花客の便利を計る、其の配達のは早いのは勿論、大きな商店會社ホテルへなどへは、電信局から人を出して置いて、注文の電報を受け付けさせて、サツと手早く集配するといふ風ぢや

### 第三十三 通貨

○米國の通貨は、白銅の五仙、銀の五仙、十仙、廿五仙、五十仙、銅の一仙が補助貨で、外に銀の一弗、金の五弗、十弗、二十弗、仙は我が錢の二倍、弗は我が

圓の二倍に相當すが、本位貨幣である、又一弗以上幾種の紙幣もある

○西部即ち桑港地方では、金銀貨が多くて、紙幣が甚だ少い、銀行などへ行て百弗の紙幣をといふと容易にない位、みぢや、然るに東部即ち紐育などでは、日本のやうに紙幣ばかり多くて、金貨には減多にお目に掛られぬ

○西部の地方では甚だ紙幣を珍重する、何分金貨でも、何百弗と持つには厄介で、紙幣のやうに便利でないからぢや、又東部でも金貨よりも矢張紙幣を便利として、金貨を悦ばぬ風があつて、若し買物の時に、金貨でも辨はふなら、此奴田舎者ぢやないはれるので、其れが嫌さにワザワザ金貨を持餘してゐる者もある位、みぢや

○米人が紙幣を扱ふのは、極めて無造作なもので、皺くちやに揉み破れてゐるものもある、又金銀貨などは、ザクザクとズボンのポケットに入れて置いて、無造作に攫み出すといふ風で、御生大事に鱈口や財布に入れて



置くのは幾んど婦人ばかりぢや

○其れから桑港地方には、一仙の銅貨が滅多になくて、物價は大抵五仙を最低位としてある。新聞紙なども一ヶ月の代價が五十仙とか六十仙とかぢやけれど、一枚買となれば五仙宛で、煙草でも何でも、一寸した買物に、必らず五仙とか、十五仙とかで、五仙以外の端下がない、一仙銅貨を見るのは、只郵便切手や葉書を買ふとき、釣銭に受取る位なものぢや、併し葉書や切手を買ふにも、矢張五枚とか何枚とかいつて、成るべく五仙以外に端下の出ぬやうにする

○其れで紐育などへ往て、葡萄一房十八仙などいられると、恰かも外國へでも往つた心持がする。紐育邊では一仙銅貨が多いから、五仙以下の端があるのぢや、代價二弗といふのを故らに一弗九十九仙など、正札を付けて賣り出すのもあるが、桑港ならば、一弗九十八仙のものも、上げて二弗にするのが例ぢや

### 第三十四 造幣所

○通貨の序にミント、即ち造幣所のことを話そう

○カリフォルニア州は、金銀の産出が多い所ぢやから、桑港に合衆國政府のミントがある、毎日午前九時から十一時の間に參觀を許すといふから、一度往て見た

○玄關を入ると、控所がある、其處へ備へられたる帳簿へ自分の姓氏をサインする、茲には各國新古の貨幣が陳列されて有て、發行年月歴史まで添てある、太古野蠻時代の貝類の貨幣から、支那、朝鮮のまで有て、我が王朝時代の通貨や、慶長大判や天保錢やら、何から何まで陳列してある

○追々參觀の男女が集まると、一人の役人が出て来て、一隊の人数を限つて、先着の分丈けを案内する、廊下の要所々々には兵士が居て、一二三と呼んで參觀人の數を調べて、一人でも間違つたら打放そうと、彈込の



鐵砲を突付てる處は豪勢ぢや  
 ◎先づ粗鐵から追々仕揚げて、鍛鍊に鍛鍊して、金銀を焼いて、器械で丸い棒にする、之を又器械で輪切にして、丁度貨幣の大きさにする、之を又大きな槌の下りる器械の間へ挟んで、表裏に文字模様を打出して、完全な通貨にするといふ順序で、凡そ二十餘ヶ所も器械室がある、案内の役人が一所々々で巨細に説明して聞かせる  
 ◎其れが済むと又元の廊下へ出て、役人殿皆に宣はく「既に御案内の折一々説明仕つたが、若し御不審の點があつたら御遠慮なく御聞下されい、下官出来る限り御満足に相成るやう説明いたします——イヤ誰殿も御質問が無い所を見ますと、差して御不審が無いと存じます、其れで下官も御案内の甲斐があつて本懐の至りで、諸君は御承知の通り、毎日午前九時から十一時の間なら何人にも縦覧が出来ますから、貴女並びに紳士諸君、御歸宅の後には御一家並びに知友の方々へも

御吹聴あつて、御誘ひ合の上、尚ほ又御來觀のやう希望いたします」と何のとは無い淺草奥山の見世物師の口上のやうぢや  
 ◎官吏で斯様口上を述るのは、日本などでは決して無い所ぢやが、何事も民尊官卑の米國で、官吏が人民の機嫌を取るに勤むる結果、斯ういふ愛嬌も振撒くのぢや  
 ◎紐育にも造幣所があつて、是も一覽したが、桑港のほど規模が大でない併し一枚幾十萬弗といふ大きな金塊を幾枚となく扱つてる所などは羨ましい程ぢや

### 第三十五 日本人の氣受け

◎米國に於ける日本人の氣受けは、ドウか、地獄の沙汰も金次第殊に拜金宗の盛大な米國では、猶ほの事言ふ丈けが野暮であろう  
 ◎桑港などでは、日本人と見れば、掏賊も寄付かぬといふ位で、彼れ程



多い辻君すら決して日本人の袂イヤ袖を曳かぬといふとちや  
○桑港に居る日本人といふたら、立派に獨立してゐるのは商人官吏會社  
員位なるもので、多くはボウイとか何とかに住込んでゐるのと、其れも餘  
り氣の利いた役廻りには有付け得ないで、下婢どんの下役となつて、下  
婢どんの言付けに従つて、掃たり拭たりする役をするのが多い有様ぢ  
や

○其れから桑港近在の田舎で稼いでゐるのは、百姓位なるもので、ちよい  
く桑港へ出掛けるが、風俗習慣に染まぬ上に、如何にも汚い而して野  
卑に見えるから、自然日本人を下等人種として扱ふ、往來でも小供など  
が、シャツプ／＼といつて馬鹿にする程ぢや

○併し中央の大都會シカゴへ行くと、茲の大學に日本人の教授があつ  
て、其れが蛙のとで何か發明したりしたので、殊に日本人の數も少くて、  
勞働したり奉公したりする者がないので、日本人は何でも腦髓の至極

宜しい智識のある人種ぢやといつて、中々尊重されて居る

○紐育などでは、日本人の旅行者といへば、大抵歐洲から往返する者が  
無い、世界を股に掛けて旅行する者は、智慧も富も氣力もある最上人ぢ  
やといふ風であるから、之を輕蔑するどころで無い、在留してゐる者でも、  
商賣や會社に従事して、三井にしる、正金にしる、堀越にしる、森村にしる、  
關西貿易にしる、立派に歐米人を相手に差して後れを取らぬ、エール大  
學や、コロンビア大學や、ハーバート大學、ボストンに在るが、に在る學生  
でも、成績は皆優等であるから、日本人といつても決して輕蔑するやう  
なとは無い、桑港の方面から見ると丸で反對である

○尤も近頃紐育市へ編入されたブルックリンの方には、水夫などをし  
てる日本人が澤山に居るそうぢやが、其れでも、桑港の日本人のやうで  
は無い

○斯ういふ事實がある、或る日本人が紐育で若い婦人に伴はれて高架



鐵道車に乗ると、同じ車室に乘合はした二人伴の若い男が、頻りと此の婦人に目を付けて、竟には「彼の女は唯のものぢやア無い」と言た聰くも之を聞付けた婦人は、ズカ／＼其の男の前へ往て「君達は私をたいの女で無いと言つたが、然らば醜業婦とでも見たのか、其れは察する所、私が日本の紳士を同伴したのを怪しいといふのであるが、全躰失禮ながら君達は我が亞米利加合衆國の國民として外國人を待遇する方法を知てるか、我々の作法としては外國の紳士を優待して有らゆる便宜を與へるのが名譽としてある、私も此の日本紳士が土地に不案内であるから、何かと心添えをして案内してゐる所だ、其れを心得ずに怪しいとは何たるのだ、君達のやうな無禮な仕方は、私に異存が無いとしても、外國人たる日本紳士に對して濟まぬと思ふ」とイヤ手厳しく遣付けた、理の當然に他の乗合一統喝采したい程思つて二人の男の方を見詰める、二人の先生眞ッ赤になつて、泣出さんばかり「全くそういふ心得で無いか

ら何卒御勘辨を」と平謝まりに謝つて辛と濟んだともある。是れで米國婦人の氣象も分るが、併し日本人の氣受けも亦以て推知され得るぢやろう。

○日本服を着て迎ても外出などは出来ぬ、家の内でも犬に吠えられる恐れがある位、ぢや而して日本服は寐巻と視做れてゐるから、之を着て人の目に觸れるのは、太だしい失敬として卑められる、着た所が一室内を密閉してからのとぢや

○尤も前年桑港で、日本の女を子守に雇ふて、其れに強ひて日本服を着て居させた米人も有て、是は自分方の子守女には斯様異様な装をさせて置くといふ好奇心からで、其の子守女は到る處人に笑はれ馬鹿にされるのを嫌つて、普通の洋服を着せて呉れと頼んでも、主人一向に用ゐぬ、竟には日本人同士で其の主人へ少女の自由を束縛するのかと談じ込んで、頭く西洋服に着替させたとも有たげな



○誰れでも外國に居ては、恰かも己れ一人で以て日本國人を代表するやうな氣持がして、自尊心が太だ熾んになる、其れで化粧とか衣服位るな未節のために、堂々たる日本人全躰の名譽を害してはならぬと出来る丈け禮儀作法も守つて、彼等に晒はれ卑めらるゝとのないやうにと勤める強ちに半可通で米國風に染み込むのではなからう

### 第三十六 公私の禮儀作法

○日本人は、自分の國を東洋の君子國など唱へて、世界に双びないほどの禮儀作法の正しい人間と心得て、而して西洋人を毛唐と稱して、歐に近い禮法などを守らぬ人間としてゐるやうちやが、事實は全たく反對である

○成程日本には昔から小笠原流とか何式とかいつて、襖の開閉から膳の持運びやうにまで六ヶ敷禮儀がある、併し其れは一家内に限るとや、

個人同士の間に限るので、戶外に於て、公衆に對しての禮法といふものは完全でなかつたやうぢや、且つ其の小笠原流とかいふものすら今は廢れたやうで、一般に禮儀作法に心を留める者が無くなつて、未だ一定の禮法が無いからでもあらうが、小學校ですら、禮儀や作法を教えぬ、是れで禮讓ある君子國もないでは無いか

○米人(寧ろ西洋人總て)は、總て公衆公けといふのを重んずるとが深く、而して己れの自由を大切に守る丈け其れ丈け人の自由も亦尊重するから、遠慮深く、思ひ遣り深く、苟くも我儘放題に振舞ふといふやうなとは無い、大躰の禮儀作法は多く之から割出されてゐるやうぢや

○芝居や寄席や角力などを見物するにも、日本人は前が高いか、帽子を取れどか喧しくいはれても、中々應ぜぬ、多數の人の迷惑などは、聊かも頓着せぬといふ風ぢやが、米人には少しも左様いふとが無い。而して日本人ならワイ／＼ガヤ／＼聲高に評したり、囃したり、我れ面白の人



迷惑、少しも遠慮をせぬが、米國では土方人足のやうなもので、聲高にすら話し合はずに、靜肅に控えて見物するのが例で、其の相違の甚だし

いのが先づ著るしく感ぜらるゝ

○狹い所を往來するにも、例へば日本で芝居や寄席などの終たときは、我勝ちにと先を争ふて、人の柑の下を潜り脱けるやら、前の人を押除け押倒してまで先へくと進むから、婦人などは着物や帯を汚されたり裂れたりして閉口するが、米人には決してそんなとは無い、前からくと出て荷くも人に觸れるとすら遠慮するといふ始末ぢやから、如何に多人數の混雜でも、騒々しいとなどは些もない

○瀛車などに乗ても、日本人は大胡坐を搔くやら、太だしきは長くくと横に寐轉んだりして、無作法を極めて、我れ獨り席を占領して後から乗た人の場所が無くても、頓着せぬ、ち負けに酒まで呑んで四邊を汚くしたり、放歌放言したり、矢鱈に人を見詰めたり、又他の人の咽ぶも構はず

にバク／＼煙草を吹かしたり、大肌脱になつたり、尻を捲つたり、イヤ何とも名狀の出来ぬ狼藉をやるが、米人は極つた席へ正坐したまゝ、容も崩さぬし、音高に話してもせぬ、飲酒喫煙は無論せぬ、チャンと行儀能く居住ひを正してゐるので、總てが靜肅に遣つてゐる、此等も亦天淵月籠の差ありといつて宜からう

○乗合馬車の中などでも、そうぢや、定員が極つてゐるのに、毛だらけな脛を思ふままに弘げたり、兩腕を張つたり、自墮落に躰を斜めにしたり、或は大風足敷の包みを抱えたりして、他の人が席に困つても一切お構ひなしの野蠻流を遣るのが、日本風ぢやが、米國にはトンと見當らぬとぢや

○能く秩序を重んずるとも亦日本人に無い、美風ぢや、往來の混雜する時などは、各々右へ右へと進むのが例ぢやから、同じ一本の人道でも、右側を行く人、左側を來る人といふ風に自然とハッキリ分れてゐる、而して



進んで人の前へ通りぬけるにも、若し少しでも其の人に觸れば、丁寧な「御免下さい」と詫言て行くので、丁稚小僧のやうな灣白者ですら一々詫言て行く、決して人を押脱けるなどいふとが無い、又突當つても無言で居るなどの無禮者も無い

○人馬諸車の往來が混雜する時、巡査が棒を擧げて一寸と制すれば、皆一度に止つて、其の指圖の通りに進退して、苟くも之に違背する事が無い。其の趣丁度軍隊が將校の號令で分列でもするやうな形である、日本人のやうに陛下の御通行筋ぢやといつて、巡査がそう前へ出るなと制しても、尙ほ出たり、或は巡査の言付を聽かずに、何か屁理屈を並べて巡査をへこましでもするのを、何よりもエラそうに思ふのと較べて如何である。

○其れに西洋人は決して聲高に話さぬ。就中多人數の居る處では、多くの人の妨げになるから、殊に低聲に叫くやうに相語る。然るに支那人などは博物館の中でも何でもキヤア／＼大聲に話すので、太く卑められる。支那人が嫌はれるのも、其の聲高なのが確かに原因の一ツぢやといふ、日本人も聲高の方ぢや

○總じて多人數の場所では、最も行儀能く、慎み深く、注意深く、能く作法を守つて、其の品格を崩さぬ。旅中でも何でも、嚴に身を正して、日本のやうに旅の耻は搔棄てなどいふとが無い

○往來を歩くにポカンと口を開てるのも無ければ、歩るきながら横などを向いて、別な物に見惚れて、他に突當るも知らぬといふやうな間拔も無い、目と足は必らず同一方面に向いてるものとしてある

○途中で葬式に會へば、何人も哀れを表して、肅然容を更めて、苟くも禮容を失はぬ、而して車馬は勿論、總ての通行人が道を讓る、日本のやうに面白氣に其の行列を見物したり、道を邪魔などいふは、ぬばかりに冷遇するが如きとも無い



○高架鐵道車や電氣車など總て乗合車の中でバック／＼煙草を吹かす者が無い、皆容を正して他の少しでも迷惑にならぬやうと、高聲で話すとすら慎んでる

○人の心持を悪くしたり、機嫌を損ねたりするとは、驚ろく程細かな注意を以て避けるべく勤める。殊に言語の能く通ぜぬ外國人の前では、聲高に笑ふとすら慎む

○人の前で鼻の穴をいぢツたり、爪をいぢツたりするは太だしい無禮で、髯を捻るとも亦宜しく無い、兎んや頭を搔いてふケを落すやうなことをやるやら、髯を能く剃らぬのも、蓬々たる頭髮も亦無禮で、ズボンの釦が一ツでも外れてれば、巡査から治安妨害ぢやといつて五弗の罰金を取られる位ぢや

○酔ッ拂つて人の前へ出るのは太だしい無作法として卑められる、殊に婦人に對して然りぢや

○往來で唾を吐くにも所構はずには遣れぬ。人道と車道間の小溝などへ吐くのが例ぢや

○何事にも婦人を尊ぶので、二階から降りるには婦人を先にして、昇るには男が先で、登り切てから待て、婦人を先へ遣る、車に乗るには婦人を先にして、降りるときは男が先づ降りて、婦人の手を執て下して遣る、持物例へば包み物とか傘なども男の方から持て、成るべく女を樂にして遣る、戸口を出るにも女を先にする、外套も男が手傳つて着せて遣る

○對話中に醜業婦などのとはオクヒにも出してはならぬ、又下がかつたとは一切言出す可らずで、顔から下の病氣のときへ餘りいはぬといふ程ぢや

○頭と頸と手首の外は、決して肌を出してはならぬ、又靴を脱ぐも禮でない、スリッパ(上靴)を穿くのも、自室内に限つて、其れも客などの居ぬ獨



りの時に限るのぢや

○ 帽子でも鳥打帽子などいふのを被つては禮でない。自轉車に乗る時か狩にでも往く時か或は汽車内船内丈けなら宜しいが、左もないと丁稚などいって卑められる

○ 恥かしがるとが甚だ貴ばれるので、イケ酒亞くど出しやばつたり、臆面もなく振舞ふのは却つて嫌がられて、何事も内氣に、少し人前でハニカムといふ程なのが高尚とされる

○ 十八歳以下の女は夜分など監督者か、十分監督者に信任されて居る朋友の同伴がなければ外出せぬ、随つて許しのない以上、若い婦人に手紙などを贈るのは無作法としてある

○ 約束を重んずることが極めて堅いから、訪問とか會見とかに、期日や時間を少しでも違ふれば直ぐに甚だしく信用を失つて、而して痛く卑められる

○ 往來を歩くにも、人道以外に逸しては宜ない、公園などでも、極つて人道を歩くので、禁制の場所などへ一步でも足を踏入れれば、役人から大目玉を喰ふばかりで無い、不作法無秩序の人間ぢやといはれ、同行者の躰面をも損するものといはれて、幾んど相手にされぬやうになる

○ 公園の花を摘んだり、木の枝を折取るとも亦太だしく卑められ、又罪悪とされてる

○ 人に向つて廁はなどいふのすら無禮としてある、W.C.などいって聞くので、其れも婦人へ問ふのは宜くない、成るべく下男下女かに内々で聞くので、公園ならば先づ辛抱して探し廻るといふ風ぢや、随つて同伴者に小便するからなど断はるのも太だしい無禮とされてある

○ 的に人を見詰めたり、人を指したりするのも太だしい無禮ぢや

○ 男同士挨拶するに唯だ握手せは宜いので、脱帽すると却つて笑はれる位ぢや、併し先の男に伴の婦人が有たら、其の婦人が假令知合でな



くとも脱帽して一禮せねばならぬ

○食堂などで挨拶するにあ、早うとか今晚はとかいへば宜い、其れを言  
 た上お負けに頭を下げると却て笑はれる而して何か勧められて、イヤ  
 難有いと断つた上日本流に又頭を下げると矢張笑はれる

○賣買するにも賣るものが日本の商人のやうに無暗とベコ／＼頭を  
 下げるとは無。買ふ者は勿論である。何でも禮儀は正しいが何所まで  
 も對等といふとを忘れてはならぬ、禮儀以外に矢繼に頭を下げるのは  
 卑屈か、左もなくは相手を輕蔑する仕方といはれる

○可笑くもないのに無暗に笑へば卑められる

○給仕などを無暗ときめ付けて、何か傲然と威張返るのは、ただ野卑と  
 して嫌はれる

○公人物の批評なら格別、一私人に就て彼此言てはならぬ、人を悪くい  
 ふとは相手と仲が悪いもので、いも避くべきで、人を褒めるのは宜いが苟

且にも誹れば痛く卑められる。日本人のやうに面従背譏、人の陰口をい  
 ふなどは、紳士のす可らざるとしてある

### 第三十七 世界の人類陳列場

○米國は新開國で、又自由の天地であるから、各國からの移住民や出稼  
 人が多くて、幾んど世界中の有らゆる人種を集めて、恰かも世界人種の  
 陳列場のやうである

○米國の本土人、即ち日本でいつたらコロボツクルとも見るべきは彼  
 のアメリカンインヂアンである、此の亞米利加印度人は例の銅色人種  
 で、日本のコロボツクルのやうに全く絶え果て、了はぬけれど、アイ  
 ヌのやうに其の数が少なくて、且つ年々減つて行く、米國政府は之に特別  
 の保護を與へて頻りと其の生存を圖けれど、ドウも繁殖が覺束ないとい  
 ふとである



○此の印度人は米國でも都會などでは滅多に見られぬけれど、西から往く時、シラネヴァアタ山脉を越えるところに印度人の部落が有る、其の人種は骨節が高く、色が煤氣けて銅のやうで、眼ばかりキヨロつかせて顔に種々の文身をしてるものもある、女は鶯色鹿の子の風呂敷のやうなものゝ頭へ被てるのが一般の風であるやうぢや、子供が嬰兒を背負してゐるのを見るに、嬰兒を後背向に、木を淵つた箱に入れて、之を箱の中へ立たせて縛り付たまふ、其の箱を背負ふので、嬰兒は只首と手首を動かして得るばかりである、之を背負たまふ子供が地上へベタリ尻餅を付てる處など、實に奇妙な風俗で珍らしい

○此の印度人は大抵羊や豚を飼つて、中には停車場の石炭の仲仕のやうなことをしてゐるものもある

○今の米國の國祖とも見るべきのは、即ち英國人の最も古から移住したので、其の血筋は最もポストンに多い、此のためかポストンには歴史

付の家屋などが多くて、市民も亦米人中には珍らしく歴史を尙ぶ風がある、之が即ちヤンキイなるもので、其の人相の特質はといつたら、稍々瘦き目で眼に一種の異彩がある

○英人種の中でも出稼的に多いのは愛耳蘭人で、是は一種陰險な所があるといふので、餘り喜ばれぬ、己れの父が愛耳蘭人であるのに、私はアイリッシュ(愛耳蘭人)を好きませぬなどといふ娘もある位ぢや

○獨逸人は中々多くて、辛抱強く、能く金を蓄めるので、歐洲の支那人といはれてゐる

○伊太利人も亦多い、殊に労働者に多い、是れも賃金を安く能く稼いで、而して生活の低きを厭はぬそうナ

○猶太人も多くて、且つ大抵金持である、大きな商店を出してゐるのに、殊に猶太人が多いやうで、其の容貌の特質は鼻が大きくて、鷲ツ鼻といふ形をしてゐるのぢや、商賣が巧くて、狡猾い處もある代り、又直段にも勉



強する、又猶太人の特色として評判高いのは、猶太の曆年や舊祭式を株守する、其の國風に亡びても其の俗は尙ほ幾分を存してゐる、又猶太人は吝嗇であるけれど、召使ひなどには食物を十分に與へて、少しも節儉せぬ、そのようであるが、是れは善く働らかせるは善く食はせるにありといふ格言を守つてゐるのぢやろう

○西班牙人も相當にある、其の婦人はまた一種の美貌を有してゐるとせられて居る

○殊に目立つのは黒奴である、以前奴隸として耕作、其の他に多く使役した其の残りであらうが、東部諸州で下男といへば幾んど十中の七八が黒奴のやうで、殊に自用馬車の御者といつたら必らず黒奴に限るやうぢや、此黒奴先生がシルクハットを被つて長鞭を揮つて疾風の如く馬車を驅る有様、晏平仲の御者も宜しくである

○紐育では此の黒奴が中々の有力者で、黒奴ばかりで一街を存して

皆相當に暮してゐるものもある、縮れツ毛の黒婦人が美々しくめかし立て、例の長裾を引摺りながら大濟しに濟して歩く風は、イヤ實に珍妙ぢや

○黒奴でも洋人との雜種兒は幾分か色即ち黒色が薄いやうぢやが、二代の後は又眞ツ黒く、と元に復るげナ、其の黒さといつたら非常なもの、桃色の極厚い唇を働かして、バア／＼饒舌て目と齒ばかり白く動かしてゐる態は、ドウも變挺極つてゐる、是で又寄席や芝居で種々甘い藝當をして、客を笑はせる種となるのぢや

○支那人も亦多くて、桑港、シカゴ、紐育でも皆名々支那人街といふのを作つて置く、同國人のみ一廓を構へて、而して自國の習俗言語を其のまゝに存してゐるものも異觀で、又一の特質といつても宜からう

○勤儉貯蓄は支那人の持前で、桑港などでは最初鐵詰屋の職人であつたのが、追々其の仕事に熟練すると共に、金も蓄めて、竟に獨立して盛ん



に鐘詰業を營んで反對に以前の雇主を使役するといふ素ばらしい勢ひなのもある

○支那人の最も力を入れる商賣は肉屋、洗濯屋、穀物屋などで、何でも貧富人一般に必要な商賣を心掛けるやうである

○支那人は大抵金持ちやから、例の拜金宗の米國婦人の之と結婚するものも多い、紐育ばかりでも年々支那人に嫁する婦人が少くも五十人、多いときは二百人からのともある、一度支那人に嫁した婦人が媒介で、又新たに米國婦人と支那人とを結婚せしめるので、法律が米國婦人にして東洋人、殊に支那人に結婚することを許さぬといへば、海上の沖合遙かな所謂公海、即ち米國の領海以外の船中で式を擧げるげナ

○支那人でも開けた奴は、頭から着物まで皆西洋風に遣て、トントン日本人かど見違ふのもあるが、言語で非日本人たるとが分る

○米國人は襟度宏大ともいほうか、ドウも外國人を毛嫌ひせぬ、外國人

ぢやといッて少しでも目を付けたりするやうなとは、女小供にでも無いとぢや

### 第三十八 諸種の運動會

○米國人が運動に心を注ぐその深いのは驚ろくばかりで、富豪などは所謂輕車肥馬で朝夕郊外を駈廻つて運動する、紐育の郊外にある高橋ヤリントン橋などは、ハーレム河を中間として左右の兩丘に架け渡した橋で、此の邊は樹影風光など雅趣ある閑境ぢやが、茲へ肥馬を駈り輕車を馳する貴女紳士が太た多い

○紐育の coronia 大學などでも、運動場としてある大きな家屋があるが、一方は機關室で總ての蒸氣や發電器もある、其の一方には廣々とした運動場があつて、學生は種々の柔軟体操やら飛ッ競やらを遣てる、其の上の四方へ丸く作られてある機敷では、又颯りと自轉車の乗ッ競



を遣てる者もある、又下の方へは湯と水との兩池があつて、學生は係りのものへ衣服を預けて、泳ぎ服(胸と腰部を蔽ふもの)を借りて来て思ひくくに飛込んで泳ぎ廻るもあれば、高く梯子龍の上から池中へ入り落ちる者もある

○公園などには、必らずベースボールを遣る場所があるし、外に運動場といふのがあつて、ベースボールや競走や障礙物跳越競走やらを遣て多くの紳士貴女を招待して見物させるやうになつて居る

○各大學生のベースボールや競走があると、米人が其の負最くによつて頻りと其の勝負に注意し熱心すると、東京ッ子が回向院大角力の勝負に力瘤を入れるのよりも甚だしくて、新聞などは其の記事で過半を適切れば、男女寄ると觸ると其の噂さばかりといふ風がある

○桑港の公園の先で、太平洋に面した處にクリウハウスといふのが有て、其の博物館には諸種の植物ぢやの、古今東西の天然人造物ぢやの、寫

眞繪の覗き機關ぢやのもあつて、其の下には又泳ぎ場がある、是は湯を湛えた大きな池で、上に樋を架けて茲から梯子でもつて瀧などを拵へて置く、此の湯の池で泳ぐものは十仙づゝの料金を拂つて、衣服を預けて泳ぎ服と手拭とを借りて、茲へ飛び込むので、男は勿論、婦人までも泳いだり潜つたりして頻りと興じて居る、東洋人には總て茲で泳ぐとを斷つて居たけれど、數年前日本人丈け大目に見られて、時々泳ぐ連中もあつたが、例の流儀で池の底を潜つて往て婦人連中へ巫山戯たりなどしたといふので、今は日本人にも禁制と爲つて居る

○又桑港のヘイト街に一種の遊歩場があつて、十仙の木戸錢を拂つて内へ入ると、寄席もあつて、美人の獅子使ひ、マニラ戦争の活動寫眞滑稽講談も遣つて見せれば、獅子や虎などの猛獸及び珍奇な獸類を集めた動物園のやうなものもある、廻り舞臺の木馬を据付けて置いて、之に人を乗せてグル／＼廻らせるものもある、小さいな流車に小供を腰掛けさせ



て細い鐵道を走らせるのもある、其の四方へ自動鐵道を架けて置いて、五仙出す客へは好きに乗せるが、高い所から低い所へ降りて、其の勢いで又高い所へ上げて彌々益々其の速力を早める仕掛けぢやが、之に乗ると帽子を吹飛ばされたり、曲り角などでは動もすれば體を放り出されそうぢやから、ウンと足を踏張つて居て十分體を抑えたり、帽子を注意したりする必要もあるし、馴れぬ人には随分險危に思はれるが、婦人などは勇み立つて乗廻てる、又真中の池には高さ四五丈の所へ宮殿のやうなのを建て、是から梯子を架けて其の板の面へ水を流して置くが、此の上を逆落しに自轉車で乗り降るものもある、首尾能く乗降れば五十弗の褒美を遣るそうぢや、又此の上から小舟を流し落すのもあるが、婦人客なども乗て居て、小舟がズツと池へ落ち込んで其の四散せしめる飛沫に衣服を濡して、キヤツ〜と興じてるものもある

○紐育の在で、ロンク島へ行く途中に競馬場があつて、毎年春秋に大競

馬會を催ふすが、非常な人出で、其の勝負を賭する金高ばかりも莫大なものであるげナ

○海水浴も中〜盛ぢや、太平洋海岸ではロスアンゼルスとか、大西洋海岸ではアタランチックシティとかいへば、夏季浴客の多いとは素ばらしいものである

### 第三十九 馬の陳列場

#### 一名美人展覽會

○紐育で毎年秋の季になるとホルスシヨウ即ち名馬陳列會ともいふべきものを催ふすが、其の見物料は大抵一人一弗づゝである、人々自慢の持馬を牽き出して、其の優劣を品評するので、其の馬を牽き出すものは羅尾服を着て十分めかし込んで氣取つて居る、併し是ばかりでは何等の興味もなければ利益も勿論無い、其れに一弗といふ見料を拂つて



入終ぬほどの客があるとは不思議のやうぢやが併し不思議でない、是は美人展覽會といふのが適當な程で多くの美人がめかしにめかして見物してゐるから、此の見物の美人を見物するのが主眼なのぢや  
○見物の婦人は豪華を街ふものや、嬌艶一代を壓せんとする野心のある美人連で、思ひ／＼に粧ひを凝らして、其の爲めには幾百萬弗も亦惜まぬといふので、盛粧美服目を驚ろかすばかりであつて、婦人服の流行は全く茲から出るといふ位のであるから、機屋織物屋などは商賣に拔目なく之を視て居る

○金目の掛つてゐる綺麗な衣服の外、リボンとか帽子とか、指輪とかにまで非常な意匠を凝らすので、中にも或る婦人は毎夜取替え引替えて高價な花束を満身に飾つて出たので、是れこそ今年ホルスシヨウの女王ぢやと評判された

○米國婦人、殊に米國の富の淵藪たる紐育の婦人が如何に豪華を街ふかは、實に此のホルスシヨウで明知されるのぢや、其れで諸新聞の評判なども非常なもので、其の重なる婦人の寫眞やら記事で過半を填める位なぢや

○此の美人展覽會で、花嫁を見立てやうといふ吉士もあれば、好縁を得んとする懐春の淑女も多いから、一個のホルスシヨウは即ち是れ米國流行の泉源で、又男女結縁の出雲大社であるのぢや、見物の野郎は婦人を見物するのが主眼で、婦人は又見物されるのが主眼で、各々一弗以上の見料を拂ふのである、馬こそ宜い面の皮サ、イヤ馬を牽廻す彼のめかし男こそ宜い面の皮サ

### 第四十 汽車汽船の聯絡

○總ての事には、コンピチーション即ち聯絡といふとが甚だ必要である、郵便物が大坂から東京まで早く着ても、其の配達がのろかつたり、又



倫敦から何程電報が早く來ても、其の技手が迅速巧妙に之を受取ても、他の局員が間抜けで、配達の手續をのろくしたりすれば、是れ聯絡が甘く付かないので、其の弊や堪えられぬ

○例へば書籍出版の一事業でも、編輯が如何に能く行ても、其の活版がのろくしたり、印刷の手落があつたりして、三者の聯絡が全くなければ、到底圓滑に往て多く効果を奏する事が出來ぬ、トいふやうな理合で何でも仕事には聯絡が必要ぢや

○日本では運輸機關に此の聯絡といふものが殊に不完全であつて、甚だしいのは幾んど全く聯絡が付いて居ない位ぢや、船が横濱へ着くといつても陸から離れて碇泊せねばならぬ、旅客でも貨物でも其の降りて手数が掛つて、船から降ても直ぐ瀛車に乗り移るといふ手順にはなつて居ぬから、人力車か大八車などに乘つて鐵道の停車場まで行かねばならぬ、其の間又瀛車に乗後れたり何かして餘計な手數面倒を見

ねばならぬ、貨物などの不便不利は大したものであらう

○此の點になると、流石は米國で、瀛車瀛船の聯絡は實に驚嘆する程甘く着てる

○先づ船のとからいはう、紐育などでは、ハドソン河の岸にはかり、七十幾個の碇船所があつて、歐洲通ひの一萬五千噸の大瀛船でも何でも其の棧橋へ横付にする、客は棧橋から直ぐ船へ上る、見送人も棧橋で袂別する、實に簡便至極なもので、桑港すらも支那日本へ往復する瀛船を二十幾所の碇船所へ横付にするので、端艇を用ゐるなどといふことが無い

○又其の碇船所が直ぐ倉庫で、貨物を積むには棧橋の上をコロコロと傾がして船艙へ入れれば宜い、卸すにも船艙からポン／＼棧橋へ投げ下して直ぐ倉へ入れられる

○然るに日本の港では如何ある、端艇で風にあをられ波にゆられ、雨に



は濡れて辛ふじて本船へ上下するので、天氣の悪い時などは貨物の揚卸しさへ出来ぬから、船の出帆が延期するとすらあるでは無い乎

○其れから船と汽車の聯絡も實に能く着いてゐる、桑港から海上六哩を船で往くとオークランドといふ所がある、茲から南部のメキシコ、北部のタコマ、シヤトル、東部のシカゴ、紐育などまで汽車が通ずるので、桑港から船がオークランドのドックへ着くと直ぐに船の上下の入口と棧橋が密接する、其れで樓上の客は棧橋の二階へ出でて、下の客は直ぐ棧橋へ出て、共に停車場に入るのぢや、語を換ていへば棧橋は停車場であるのぢやから直ぐと其れ／＼の汽車へ乗移られる

○オークランドの市から此の停車場(棧橋)までが汽車であるから、桑港オークランド間を往返する人は、片道十仙で切符を買つて、船と汽車と兩方通じて乗つて往くのぢや

○又カリフォルニア州の首府サクラメントの附近にサクラメント河

があるが、茲へ汽車が來ると船が河岸に居、船上には鐵軌が敷いてあるから、汽車が直ぐと此の鐵軌の上を走つてソックリ其のまゝ船に乗ると、船は漕ぎ出して向ふ岸に着く、船が着くと船上の鐵軌と陸上の鐵軌がキチンと接續されるから、汽車は又直ぐと陸上を駈けるといふ趣向ぢや

○ワシントン府から紐育を経てポストン府へ往く汽車も矢張此の趣向で、ワシントンから汽車が紐育と東河を隔てるニウセルシーへ着くと、河岸に俟てる船が船上の鐵軌を傳はらせて汽車を乗せてサッサツと河流を溯つて紐育の山の手の遙か外れの處へ着く、すると船上の鐵軌が巧みに陸上の鐵軌と接續するから、汽車は又ゴロ／＼陸上へ走り出す

○去れば紐育のハドソン河でも、東河でも汽車を乗せたまゝの船が盛んに上下してゐる、或は貨物列車などは、其のまゝ向ふ河岸の鐵道まで貨



車ぐるみ運ぶので、此の間貨物を積替えるなどいふ手数はせぬ

○シカゴ、ヒラデルヒアから紐育へ通ふペンシルヴァニア鐵道なども紐育の對岸に停車場が有て、茲へ汽車が着くと其のまゝ乗客は停車場内の棧橋に横付けとなつてゐる漁船に乗り移る、此の船も紐育の下町と中程と、上町などへ往くのと其れ／＼分れて居て、船も棧橋の出入口も別々ぢやから、客は往く先き／＼に由て其れ／＼の船に乗る、船がハドソン河を横つて紐育の岸へ横付けする、すると直ぐ棧橋へ出て、船の二階の客は直ぐステーションの二階へ、下の客はステーションの下の廣場へ出る、馬車や荷馬車も直ぐと下の棧橋へ出るので、實に便利を極めてる

○貨物を輸送するとの多い會社などは、鐵道の停車場構内へ特約の倉庫を設けて此の倉庫から本線へ接続すべき鐵軌を敷いて置く、現に世界第一の大製鐵所たるカーチギー鐵工場の如きは、ペンシルヴァニア

鐵道の構内へ、大きな船着場を設けて、茲に鐵軌を布いて置いて、船から直ぐと貨車へ積卸して、其れを本線まで走らせるといふやうな手順を着けてる

○斯様な風であるから、米國の工業家でも商人でも、其の貨物の受渡し方が驚ろくばかり神速で、其のため競争入札などにズ／＼相手に打勝つといふのである、貨物の受渡しを神速にするため即ち斯く海陸の聯絡を能く着けて置くのぢや

○各鐵道會社の線路にも亦能く聯絡が着いて居て、貨車などは紐育から桑港まで、ペンシルヴァニア鐵道、ユニオン鐵道、南太平洋鐵道など幾會社の線路を走るけれど、中途で貨物を積替えるといふとが無い、鐵道一哩を走る其の貨賃(鐵軌の幾千と仕拂ふので、是には各鐵道會社聯合の清算人があつて、一々清算決済するから、各會社では唯だ何々の貨車が幾十百輛何月何日何時に通過したとさへ帳簿に記入して置けば



宜いので別に面倒などはない

○米國の汽車は、其の鐵道線路の長いとに於ても、速力の早いとに於ても、輓力の強大とに於ても、搭載する旅客貨物の多いとに於ても、總て世界第一である

○米國の開けたのは、實に鐵道の功力であると言ても宜しからう、米人は何でも構はず山とも谷ともいはずに鐵道を布く、固より深く注意はせぬ、唯だ荆棘を切開いて、少し土地を平して、枕木を置いて鐵軌を布並べる、其れで汽車を走らせるので、漸次土地の開けるに従つて鐵道にも修繕に修繕を加へて往くのおや、故にシカゴ以東紐育、ヒラデルホア、ワシントン、ポストンの間の鐵道などは、完全なものであるけれど、未だ十分に開拓されぬ、南太平洋鐵道などは、驚ろく程亂暴な所もある、現に野飼イナ飼人の無い牛や馬が汽車に觸れて倒れた其の死骸も野原に横つてる、鐵道の側ら處ろゝには枕木や鋪た鐵軌を置いて、修繕の場合

に備へてるのも見える

○シカゴ以西、ユニオン鐵道の外、南太平洋鐵道が近世金銀鑛のため噸に開けた太平洋沿岸からシラチベタ山脈は勿論、ロッキーマウンテン山脈をも横斷し來つて、東部の鐵道と聯絡したのは、米國の進歩に向つて實に著しい効果を來したものだといはれて居る、此の鐵道が始めて米國大陸を横斷すべき大聯絡を付けたからであるのおや

### 第四十一 政事家と實業家

○米國の諺に『英雄豪傑は多く實業界にあつて政治社會に無い』といつてある

○成程ヴァンダービルトとか、カーチキイとかいふ素ばらしい豪傑が實業界にあるけれど、政事家として之に匹敵すべき傑物が無い、ツラストなどを組織して、驚ろくべき大規模と、驚ろくべき權變勇斷を以て、商



工業を造る具合から視れば、政事家が外交上に縦横の奇變を弄して、所謂驚天動地の所作を演ずるなどといつても、幾んど見戲に等しい位のものおちや、ツラストを造るものは、一舉一動世界を左右して、數千萬億の資本を運轉するでは無いか

○併しながら政事家といつても、所謂無勢力では無い、大統領選舉といへば、米國が不景氣になるといふ位である、其れは大統領の人物次第に由て、如何なる政策に出るか知れぬ、金本位を主義とするのもあれば、銀本位を主義とするのもあるから、貨幣制度ばかりでも、經濟上に及ぼす影響は少くない、又或る政事家は、何々輸入物の税を引上げるであらうとか、何々事業を保護するであらうとか、何の國と喧嘩する傾むきがあるから、其のため何々の國々の貿易は如何なるとかいつて、大統領の人物如何に由ては、的面に其の影響が来るから、其の勝敗の形勢が明白となるまで、多くの商工業、殊に思惑的分子の多い企業商賣などは

總てが暫らく手控えの姿となつて、従つて米國一般の不景氣ともなるのちや

○されど今日となつては、以前程のとは無い、現にマツキンレイ大統領の取定めた金貨本位は、最早幾んど動かす可らざるもので、反對黨の大統領候補者ブライアン氏が、今更銀貨本位説などを主張すればする程、其の勢力を失ふといふ有様である、又米國政府の財政は近年驚くべく豊富となつて、随分能く着々と整理し行くから、此の上俄かに或る關稅をグツと引上げるなどいふ氣支も無い、又商工業の發達に連れて、大に外國貿易を擴張せねばならぬ必要があるから、米國政府とても之を土臺として、總ての外交政策を割出さねばならぬから、何人が大統領になつても、外國貿易を妨害するほど減茶な外交政策を執る氣支も無い、一口にいへば、米國大統領の選舉結果は、最早從前のやうに經濟上に著るしい影響を與えるとが無い、丁度日本でも、以前は内閣變動などい



へば株の相場に亂變下の生ずるのが例のやうであつたけれど、此の頃は山縣内閣が潰れやうが、伊藤内閣が出来やうが、株式市場ではトント落着拂つて、動かなく爲たのと一般ぢや

○米人はこういういつてる『米國の政治は政治家が行ふのでは無い、實業家が政治を遣らせるのぢや』と、成程其の通りで、政事家は總て實業家の意向に従ふのである

○けれど一ツ注意せねばならぬのは、米國が普通選舉法を行ふ國であるから、其の政事家は實に最大多數人の意向に従はねばならぬのである。明白にいへば、ツラストの如きは實業家に取つて實に有力で、又最も將來に望みのある有利の事業であるけれど、其の事業本來の性質が獨占的で、従つて一般多數なる農民職工等の甚だ悦ばぬ所であるから、此の多數人民の意向に背くと、其の出来ぬ、イナ背けば其の地位を失ふの外、無い政事家は、勢ひツラストに反對せねばならぬ、故に米國政事家は眞

實ツラストが米國の將來に有益で、勢ひの已む可らざるものであるとを知て居ても、表面ツラスト賛成と明言するとが出来ずに、唯だ反對の方針を以て十分ツラスト其の物の利害得失を研究するなどといつて、お茶を濁して居るのぢや

○併し多數人民といつても、結局其の利害の歸着點に於て少數の商工業者ど一致するから、政事家は重もに此の實業家等の意向に従ふのである。米國の政事は總て實業のためといふが、土臺であつて従つて英傑の士が政事家に稀れで、實業家に多い譯で、此の趨勢は年を追ふて太だしくなるやうである

○米人は人が政事家となつたと聞けば、『嗚呼噫彼も可愛そうに到頭政事家になりました』といつて悔む位である

第四十二 天惠地福



○日本人は自分等ほど天恵地福を得てる國の無いやうにいふのが癖で、我々も曾て外國といへば支那の一隅を見ただ位な時分は實にそう思つて居たが、米國へ行つて見れば却つて米人が天恵地福を得てるのを羨まねばならぬ

○米國では日本のやうに四時濕るといふとが無いから、物に徹の生えるとが無い、其れで總ての器物の保存に宜しい、氣候からいつても、桑港などの太平洋沿岸は、四時春のやうで、一月二月の極寒中でも日本の四月頃のやうで、七八月の暑い盛り頃でも、尚ほ朝夕に外套が要るといふ位、年中唯だ一通りの着物で澤山ぢや、但し時々霧が深くなつて、不意に寒くなる時があるけれど、其れでも寒いといふ程の寒さでない、現に桑港では暖爐が無いではないが、唯だ室の裝飾として拵へて置くので、曾て火を燃すとが無い

○シカゴや紐育は、寒暑共に日本よりも激しいけれど、空氣が乾燥して

るから意外に凌ぎ宜い、殊に夏分に於て然りである

○其れに尙更羨ましいのは地質の宜いのである、如何なる都市でも、其の海や河が皆日本のやうに土砂が埋もれるなどいふとがないから、天然のまゝ深く、如何なる大船巨船と雖も岸へ横付になる、現にハドソン河でさへ一萬五千噸からの大船を横付にして、聊かも差支が無い、斯様などは日本ではとても夢想も出来ぬ、東京灣築港といつても、大層な資本が要るけれど、米國にはトンと其様な沙汰がない

○桑港でも、紐育でも、皆地盤が岩石であるから、家屋を建てるにも、別に土臺を築く手敷を要せぬので、ダイナマイトか何かで其の岩石を砕けば、自然と地下室ともなれば、其の上へ如何に重い大家屋を作つても大丈夫ぢや

○更に羨ましいのは地味が豊饒で、天産物に富んでゐるとである、土地が廣大で、割合に人口が少いから、耕作なども所謂大農法で、肥料耕耘とも



日本のやうに十分手が届かぬのは勿論であるのに、然るに其の作物は非常に宜くて、棉花でも麥でも品質が上等の上に産額が多くて、幾んど世界の棉花や麥の市場を左右してゐる野菜でも果物でも皆日本のよりも大きくて而して甘い、カリフォルニアの物産陳列所などを見ると斯うも立派な穀物や野菜や果物があるかと思へば、殊に其れが日本ほどの面倒手数を掛けずに賣るのかと思へば、實に堪らぬほど羨ましい。

○又木材にも驚ろく程上等なのが多い、木目が模様やうに麗はしくて、木地も堅うて、而して驚ろく程大きいのが澤山で、日本人から看れば實に珍木異材とすべきものが甚だ多い。

○ヨセミテの大山林などは世界の奇蹟といつても、宜い位で、大木の根際をクリ抜いて、茲を二頭立の馬車で自由に往返の出来るのもあれば、倒木の上を多くの騎兵が隊をなして往くことの出来るのもある、其の山林が亦ただ廣大で、米國政府の保護も亦感心する程能く行届いて

○金銀の鑛山の多いとは論を俟たぬが、太平洋沿岸の拓けたのは、開けて著るしい進歩をしたのは、皆鑛山のお蔭で、カリフォルニア州は殊に有名な大銀鑛が多くて、種々な銀細具、銀製の物が桑港の名物となつてゐる程ぢや。

○石炭の産出も多くて、而かも其の性質が皆純良である、又天然瓦斯の吹き出る所もあつて、ピッツバーグが山間の偏狭な土地でありながら、ヒラアルヒアと共に米國第一流の工業地、イナ世界屈指の工業地となつたのも、全く石炭と天然瓦斯のお蔭である。

○石油の噴出も亦夥しいもので、ミシガン湖の附近から米國中部の山間は勿論、太平洋沿岸の海中へ噴き出す石油井も有つて、米國石油といへば露國石油と共に世界を支配してゐる程である。

○石も亦麗はしいのが多く出て、家屋の建築に恰かも木目のやうな、又



天然に種々の形の石のある、又茶とか紫とか種々麗はしい色の石を多く用いて人目を驚かすのも亦石材に富んでるからぢや

○水流の利用すべきものも亦多く、現に南部諸州では水力で電氣を作つて、之で盛んに紡績や織布業を興して、其の製作品を以て英國や日本の棉糸糸布を壓倒せんとする勢ひが見えてる

○牛馬羊豚を首め、人間の力を助くべき有益な獸類や、食用とすべき禽獸魚介も亦多く、廣大な野原には牛馬羊豚の群を爲してゐるも見える、河海には鮭、鱈、鯛、鰈、鱈なども多く、米人は此等山海の珍味にも飽きる程である

○斯る莫大な天恵地福を得て、而して其の土地の面積が甚だ廣大で、日本の幾十倍となく有る、ナンと羨ましいではあるまいか

### 第四十三 米國人の大氣力

○ワシントン府のワシントンモニメント(國祖ワシントン紀念のため世界中から石を寄せ集めて作つた高塔で、世界第一と稱されてゐる)や、紐育のブルークリントン橋世界第一の大鐵橋などを見れば、米人の氣力が何程大きいか幾んど測りがたい程である

○如何なる高峯深谷へでも鐵道を敷く、如何なる險山幽溪をも切開く、如何なる廣野荒原でも開拓する、其の土木工事の壯大なのを見ては到底日本人などの企て及ばぬと思はれるのが多い、日本人ならば、斯る大膽雄偉などをしやうなどとは夢にも思はぬ様なのが多い

○ナポレオンが『不可能』なる文字を字書から取除けやうとしたとあるとかいふが、米國人も亦幾んど然るもので、人力は必らず天然の勝つべきもので、如何なる造化の神工でも、人間の力で以て凌ぐと出来るものと信じて居らしい

○米國人は此の大氣力を以て思ひ切たる大仕事を遣るが、併し周密な



思慮を必らず之に加へて、其の計畫を完全にするやうにと努める、若し唯だ大膽に思ひ切つた事を遣るといへば幾んど氣狂染みた秦の始皇の亞流であらうが、米國人の遣口は左様で無い

○米人は學理を重んずるけれど、學理を實際に應用するとを最も重んずる、高尚な哲學よりも理化學が好きで、何事にも學理を實際卑近の事物にまで應用しやうくと努めてる

○米國工業の實際を調査して、大に英國工業家の反省を促がそうとした倫敦タイムスの米國特派員が、其の報告に斯ういつてる「米國で特別の器械や工場を建てるのに、其の設計を爲すため専門家を重用するとは、我々の大に學ぶべき所で、又最も注意すべき要點である、勿論我が英人とても斯る専門家を重んぜないではないが、併し英米兩國の設計専門家は大きに性質が異つてる、英國で設計を立てるとを仕事としてるクレート、ジョウチ、ストリート、マクネートといふ團體が有て、受負人な

どは只其の立てた圖面や説明に由るのである、けれど米國の設計を拵へる工學者は皆建築製造の實際に富んで居て、能く學理と實際を考へ合せるから過失はないが、我が英國では曾て大橋梁を架けやうとして其の設計を立て、イザ工事着手といふ段になつて、到底實際に出來ぬがため、其の設計を突戻した奇談もある、斯様などは決して米國に無い、英國のウエストミンスターには鐵道に關する設計製作者があつて、鐵軌でも橋梁でも停車場でも、涼關車客車貨車でも、總て設計を立てるけれど、畢竟在來の型を復寫する位なもの、別段進歩するものが無い、是は設計でなくて復寫ぢや、約言すれば英國の設計は工事に無關係な事務所で拵へられるといふ有様で、トンと米國のやうで無い」

○斯る有様で、米人は其の設計に太だ重きを措くから、一寸家屋を建てるにも、其の専門の經驗ある學者から設計して貰ふといふ風ぢや、會社などでは必らず専門の經驗ある學者を雇ふて置いて、設計係として置



○且つ此の外に統計を利用するものが巧みで、是れも専門の學者を置いて鋼鐵を製造するにも、世界の鋼鐵産額が何程あつて、之を需用するものが何程あるから、何程製造すれば宜いとか、是れだけ製造すれば利害の結果が如何であるとか、或は何處／＼では何々の工事を起すから、此れ／＼の需用が新たに増加するとか、總て精密に統計させるのぢや、彼のツラストなども、殊に統計學者を幾人も置いて、其の營業品の中外に於ける給需の數を明細に調べ上げて、精密に統計して、其の製造高を加減もすれば、價を昂低するに、着々其の圖星に中るといふ有様ぢや。

○大氣力に加ふるに此の細心なる考案手段を以て、其れで勇斷果決に遣るのが、即ち米國人の特質である。此等は我が日本人の最も倣ふべき點と信ずる。

### 第四十四 新奇な新發明

○米人位る新奇を好んで、新發明を尊ぶものはなからう、而して器械、其の他の新發明が續々と出て来る。

○米國は國が廣くて人が少い、仕事が多くて、勞力が不足ぢや、其れで賃錢が甚だ高い、其の結果として人の勞力に代り、人の勞力を省くべき器械の發明されるのも當然であろう。

○器械の精巧なのは驚ろくばかりで、彼のヒラデルヒアの造船所、ペンノイドの鐵工場へ往て見ても、廣大な工場に職工の居るのが甚だ少くて、寧ろ寂しい位であるが、其の代りに器械の運轉するとは驚ろくばかりで、石炭を大きな籠に注いで、之を焚いて、其の焚殻を掬つて籠から取出して、其れを又捨てるまで、總て器械の力で遣て、唯だ一人監督者を添えて置く程で、何百噸といふ大きな起重器でも、皆トラヴェリノグで、



器械の力を以て自由自在に働かせる地獄の籠かと思はれる大きな籠の中へ澤山の鐵をくべて、其れを焼いて鋼鐵にするまでも、多く器械を用ふるので、器械の活動する有様、唯だ僅かな人が一舉手一投足で以て驚ろくべき大器械を縦横自在に活動させる有様は、殆んど鬼神の如しといつても宜しい

○總ての材木の切板、例へば垣根にするのでも、橋板にするのでも、床板にするのでも、其の幅から長さまでが皆幾んど一様で、之を組合せ繋ぎ合せ並べ合せて種々の物にするのぢやが、是れは器械で以て木材を切割るから斯うなるのである、以て何事にも器械を利用する一斑が推知し得られるであらう

○織物なども日本流の手織では往けぬといふので、驚ろくべき精巧な器械を工夫し出して、木綿物は申すまでもなく、精巧な絹物までも織り出すやうになつて、近來は世界織物業の冠冕たる佛國の里昂ですら、米

國から此の器械を買入れるやうになつたといふとぢや

○従つて又器械の發明が盛んで、一寸したとを發明しても、發明者の所得は莫大なものである、電氣應用で種々の發明をしたエヂソン博士なども、始めは何の國でも同じな貧乏學者であつたのぢやが、發明の利益を以て今は素ばらしい金持となつて居る

○何事にも意匠を凝して種々な發明をするので、一寸した「翫弄物」にすら巧い發明がある、今日では何か發明品で器用な物といへば幾んど米國人の一手專賣の姿である

○米人が新奇を好む心が又非常に盛んで、何か新發明の物といへば喜び競ふて買ひ入れる、今朝買ったばかりの椅子が有つても、何か一寸新奇な椅子が發明されたと聞くと、直ぐに之を買入れて、前のはサツ／＼と取捨つて、聊か惜む色が無い、何でも新發明品といへば錢に糸目を付けずに我れ勝に買つて用ふるといふのが米人の最大な自慢である



○米人の此の最大な自慢が又彌よ新發明を促がす原因となつて種々驚くべく巧妙な器械も造り出されるのぢや

○『百年の設計などいふ勿れ活た人間ぢやもの百年の間にはドンなエライ新發明をするか知れぬ何でも思ひ切てドン／＼早く遣つて退けて新發明があつたら有た時サツ／＼と之に取替れば宜い』といふのが米人の流儀で、家屋、鐵道、橋梁、道路、其の他何事にも皆此の流儀で遣つて往く

○鐵道會社なども此の覺悟で、サツ／＼と鐵軌でも、架橋でも、汽關車、客車、貨車でも取替え引替え改良し往くので、其れがため利純の内から其の準備金を積立て、置くのが例である、此等は日本などでは未だ眞似人もない處ぢや

○其れ此れのため、米國の進歩發達するところが非常で、其の面目一年と改つて往て、殆んど三年見ざれば殆んど別國かと思はれるまでに進歩

し往くといふとである、近頃英、米、獨三ヶ國の鑛山事業を視察した人の話に『十二ヶ年前に此の三ヶ國の鑛山等を巡視して、今年も二度目に亦廻つて視たが、英國では殆んど普通りで、依然たる十二ヶ年前の舊態を存してゐるから別段に得る所もなかつた、獨逸は流石に學問が盛んな國丈けに種々な學理を應川した器械もあれば採掘法もあつて、進歩の形跡歴々として明白であるが、獨り米國に至つては、幾んど全く前の態が無くなつて、何事も一新してゐる、其の進歩の迅速なのは實に意外である、今年乃至六年の後には又必らず一見して嘆驚する程までに進歩し變化するであらう、實に驚ろくべき國である』といふとがある

### 第四十五 米國年中行事

○日本では何月から何月までが春夏秋冬であるか、人に由て説が違ふやうぢやが、米國では三、四、五の三ヶ月が春で、六、七、八の三ヶ月が夏で、九、



十一月の三ヶ月が秋、十二月、一、二の三ヶ月が冬とされてる、十一月の中に少々雪が降つても、米人は未だ冬季に入らぬから、ナアに大したことは無いと言つて済してゐる風ぢや

○一月一日は矢張新年の祝ひがあつて、人々孰れも新年を祝ひ合つて一寸した物などを遣取するが併し日本ほど般かでは無い

○七月の四日が米國獨立祭で、都鄙共に種々な趣向をして祝ふので、先づ米國では重要な祝祭日である、デシントンの誕生日や命日にも何かするやうぢや

○職工の休日といふのが有て、政府の役所、學校から銀行會社なども皆休業する

○十一月の一番末の木曜日(サンクス、 Giving Day)が感謝日といつて、神が人間に食物を與へ玉ふたのを感謝するので、此の日は戸々七面鳥を料理て客を招くのが例となつてゐる

○十二月のクリスマスは、日本の一月元旦にも相當するやうなもので、互いに何か祝ひ合つたり、品物を取遣するので、各商店の大賣出しもあるし、品物に花を飾つて客を引けば、人氣も何となく浮立つて、小供などは指折數べて頻りに其の日を待つ、クリスマス前の景氣は丁度日本の大晦日も當ならずで忙しさも忙しければ、遺算段に屈托する者も多い、而してクリスマス當日はトンと正月のやうで、何處でも彼處でもお芽出度くゝの聲ばかりのやうぢや

○十二月三十一日の大晦日(オハシラ)は又妙ぢや、此の夜は各商店とも商ひもする男女老幼亦徹夜同然に歩き廻る、而して手にくゝ玩弄の喇叭を持って居て、不意に人の耳元でブツブツくゝと吹き立てる、イヤ騒々しくて耳が割れるやうぢやが、此の夜に限つて何人も怒らぬのがお極りぢや、而して男共が娘連に巫山戯たり、女が男共を諧戯つたりするとも亦公然許されてるから、夜中キツヤくゝといふ般いであるげナ



○又州シラに由て種タネくな祝イハヒひ日や何ナニかもあるやうじやが取立トてゝ  
程マのどでも無い

著者 小田舎物 〇

米國漫遊雜記 終



明治三十四年一月十七日印刷  
明治三十四年一月二日發行

定價金三拾八錢

著者 松井廣吉

發行者 大橋新太郎

印刷者 石川金太郎

印刷者 株式會社 英舍

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館











慶應義塾々長鎌田榮吉君著  
**歐米漫遊雜記**  
 第五版  
 全壹冊

洋裝四六列紙數五百頁  
 ▲正價金四拾五錢 郵稅八錢

繪口  
 ○歐米漫遊の一行○蘇格蘭フォース橋○伊太利セル  
 トザの古刹○伊太利ウエニス府ゴンドラ船寫影○  
 葡葡牙シントラの城○埃及三角塔下寫影○北米ナ  
 イヤカラ瀧にて防濕服裝寫影○其他數葉挿入

著者往年歐米に遊ぶこと年餘其歷程の廣  
 汎なる其觀察の細微なる他に其比を見ず  
 隨觀隨錄したるもの今之を一巻に收輯  
 す、英米獨佛露伊其他各邦の文物典例國  
 勢は勿論博物館美術館劇場著名なる建物  
 舊址名蹟等仔細に敘述して餘蘊なし加ふ  
 るに著者が齎らせる珍奇なる寫眞十數葉  
 を挿入す、最近歐米の旅行案内として必  
 讀の新書なり。

發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

改正 增補 繪口寫眞銅版密圖入  
 有名勝景數十入

(文序君昂重賀志川矧)  
 著君文左崎野  
**改正漫遊案内**

目次  
 △鐵道案內  
 △名所及溫泉海水浴  
 △東海道のの  
 △山陽道のの  
 △山道のの  
 △東山道のの  
 △鐵道案內

本書は紙數四百四十餘頁に成るに  
 して著者實歴の筆に於て各地方  
 文流暢且つ簡明にして詳密な  
 名勝を案內するに頗る詳密な  
 り。旅行漫遊者に於て今や漸く  
 らざる書なり。候此の便利計  
 行に佳なるの候此の便利計  
 携へたるべからざるなり。

第二版廿一 全壹冊袖珍美本  
 正價四拾錢郵稅六錢

侯爵黒田長成君題字 其他諸大家序  
 子爵長岡謙澄君題詩 大橋乙羽君著  
 男爵末松謙澄君序文  
 大橋乙羽君著  
 (第拾版)  
**續千山萬水**  
 全壹冊  
 洋裝金  
 字  
 入補  
 紙  
 數七  
 百頁

綴内東海東山道 風景寫眞百二拾挿入  
 及中國四國九州 風景寫眞百二拾挿入  
 ▲正價金五拾錢 郵稅拾錢  
 本書は辱なくも九重の御覽を賜ふの榮  
 を得、發售以來忽ち第拾版を重ねるの榮  
 運に會したれば、更に大増訂を企て四  
 國九州中國一帶の案内記六十頁に其  
 他の風景寫眞三十二ヶ所を加へ、且  
 つ旅人智慧の板てふ新遊戯をも挿み、  
 初版以來紙數百五十餘頁を増加し、  
 唇釘装を美にしたりべし、之れに優れる  
 旅行案内はあらざるべし。

侯爵伊藤博文君題字 櫻庭眞村君序文  
 伯爵土方久元君題詩 大橋乙羽君著  
 大橋乙羽君著  
**續千山萬水**  
 全一冊  
 洋裝袖  
 珍  
 美  
 本  
 洋裝金  
 字  
 入補  
 紙  
 數七  
 百頁

▲正價金五拾錢 郵稅拾錢  
 第三版 寫眞銅版 色刷風景百二十八  
 東洋古來第一の美本として内外の喝采  
 を博したる千山萬水は、其紀する所の  
 地、東北に止まりしを、烟霞の癖は更  
 に著者をして、東海畿内中國西海より  
 薩諸州を跋渉せしめ、是に於てか此  
 の續編あり、之を初編に比するに、經  
 る所廣きに從ふて寫眞に上れる絶景又  
 頗る多し。装幀の美麗亦優るとも劣る  
 ことなし。

發兌元 東京本町三丁目 博文館



田山花袋君著

# 南船北馬

全壹冊洋裝  
袖珍美本  
寫真銅版入

正價金四拾錢 郵税金六錢

隨處に感興を作り到處に詩想を着するは花袋氏の紀行文なり。ことに子は諸勝の見に富みて残山剩水處として至らざるなく、處として探らざるなければ、その紀行文には珍談奇話百出して、或は溪村の夕、或は深山の夜、或は怒濤岩を嘯むの邊、或は山中の湖畔など、他の紀行文には見るべからざるの妙あり、編中志摩廻り熊野紀行の如き其の精彩の躍々たる真に一幅の寫真圖なり山水の癖あるもの、自然の懷に懐かれんとする人、世に不平を抱けるもの、皆一讀せよ、必ず得る所、慰めらるゝ所あらん

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目  
博文館

男爵楠本正隆君題辭 男爵末松謙澄君序  
尾崎犬養其外名家序文 西島良爾君著

# 實清國一班

全壹冊洋裝  
正價廿五錢  
郵稅六錢

著者清國に遊學すると五年、吳越を跋渉し江漢を上下し、其風土人情の細微を探究し、今内勢の如何を視察し、蒐錄此編をなす、今日や東亞の風雲漸やく急に、歐西列強の陸梁、日一日に其歩を進め、漸く死活の危機に瀕するは清國の現狀なり。利害得失の關聯する處、本邦人士たらんもの、何人も其真相を知らんと欲する所、此書能く老清帝國の實情を悉くして餘蘊なし。

鐵脚坊 岩本千綱君著(寫真版口繪入)

# 三國探檢實記

全壹冊菊判  
正價三十錢  
郵稅六錢

本書は岩本氏が暹國を出發して安南國の内地を跋渉し其里程一千五百里此間幾百の危難に接し、萬死を冒して風俗政教商工等を觀察し來れる實記なり、一度此書を繕くものは萬感胸に起らん。

# 佐藤傳藏君著 日本新地理

全壹冊  
上製五拾錢  
郵稅拾錢  
並製卅五錢  
郵稅八錢  
菊判洋製



(版六)

(版六)

## 目次

- ◎沿革及ヒ人口交軍備政治地理人種
- ◎土生地業交通五大島及日本
- ◎自然地理湖沼外海
- ◎物産
- ◎山道
- ◎海道
- ◎北道
- ◎北海
- ◎南海
- ◎臺灣

本邦天然地理、人事地理、地方誌の三項、最新の事實に據り、確實の統計を本とし、巧妙の組織、簡潔の敘述、意到り筆隨ひ、説き盡くして餘蘊なし、彼の臺灣と北海とに至つては立論奇抜にして説明詳密中等教育の参考書、教科書として、世上他に比類あるを見ず、本邦に生れて此邦土の何たるを知らんとするの人士は一本を購ふて新地理學の直價値を評するに怠る勿れ。

發兌元 博文館

東京日本橋區本町三丁目



5/5/37 / 2/4/41



佐藤傳藏 地理學士 著  
中等教育 地理學教科書

上下二冊  
正價各金  
五拾錢  
郵稅拾錢  
洋裝總シロ  
一ス菊判



世の中等教育の名を冠して地理書を出すもの、多くは非専門家の手に成るを以て、組織紛亂、其精粗宜を得、真に中等教育に適ふもの趣きは寔に己を得ず、理學士佐藤傳藏先生夙に此に憾あり、其大學に在る、夜々斯學の蘊奧を究め、卒業の後、其造詣を以て、潛思本書の編著に従事する數年、今方に成るを告ぐるを以て、本館請ふて之を出版す、凡そ本書の材料は、先生自ら踏査する所に非ざれば、一々之を實踐家に質して獲る所其正確自ら尋常の編著にあらず、其他先生用意の周密にして類書の粹を抜く所以、冀くは一播して之を看取あらんとを。

發兌元 博文館

東京日本橋區本町三丁目

峰是二郎君著

中等教育 新編地文學

天の覆ふ所地の載する所森羅馬象綺羅整列目を眩し耳を破る日月星辰の大美觀山水花鳥の大文章之を我掌上に載して其現像結果を論じ兼て人世事業上に論及す萬有百花の中豈是より愉快にして有益なる學問あらんや、本書之を論ずる尤も詳、世の翻譯的著書の倫にあらざ先づ吾人の住處なる地球の全軀を論じ山河湖水の流動循環、氣界中の現象變化の巧妙、幽微なるものを闡明し動植物の地文上に對する配置、繁殖の關係等凡て修學上の便宜を計り直接間接に事業を引證して之を演繹し歸納し個々孤立の智識に偏せずして以て之を推蔽するの趣味を與へり本書は實に中等教科書として近來一頭地を出したる珍書なり。

全書冊背皮  
正價五拾錢  
郵稅八錢

文學博士男爵末松青萍君序

大橋乙羽君著並寫眞

耶馬溪

全壹冊  
洋裝美本

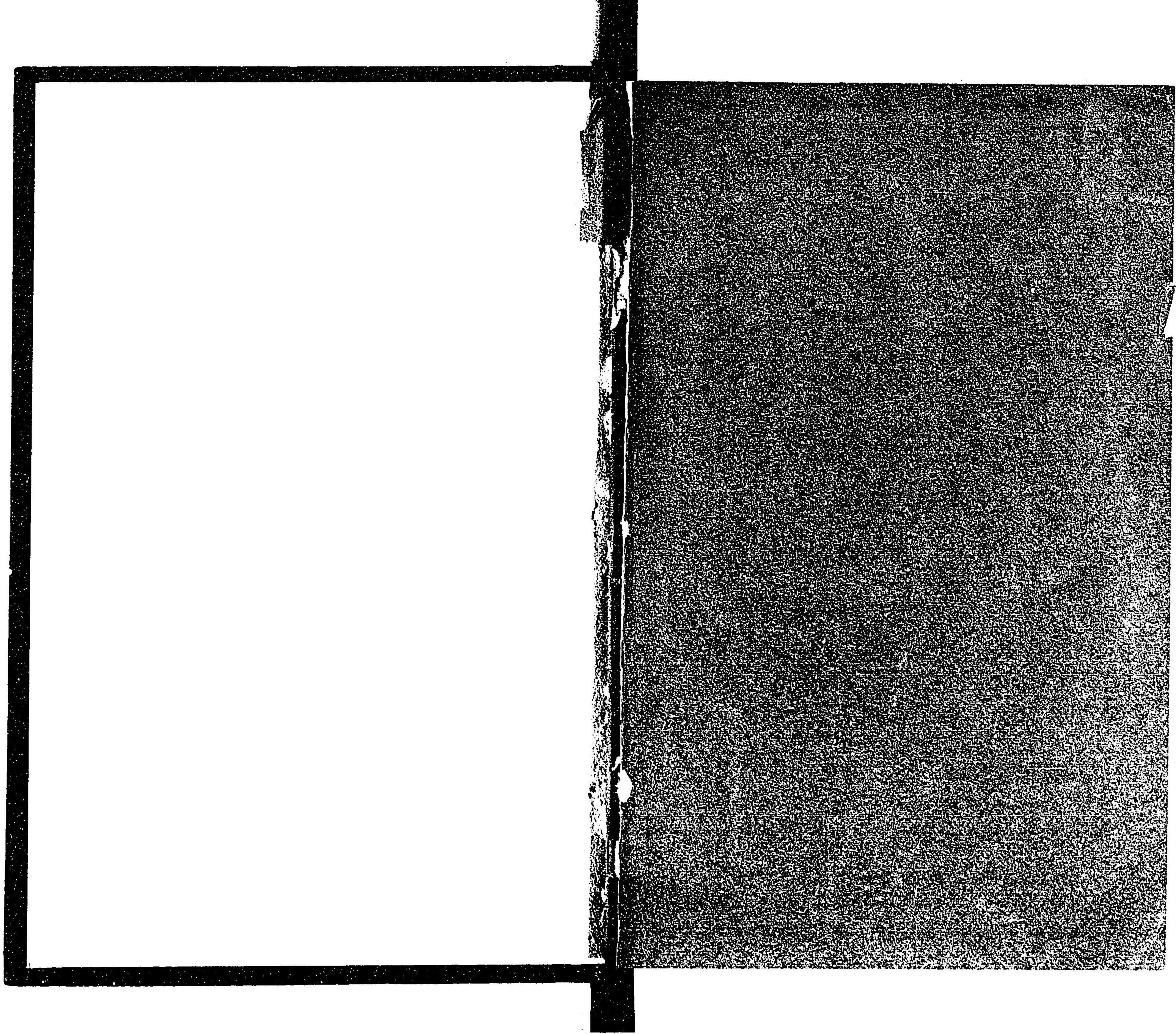
寫眞銅版五拾景挿入  
正價金四拾錢 郵稅四錢

頼山陽をして『耶馬の溪山天下に無し』とまで絶叫せしめたる豊の耶馬溪、亦著者の周踏する所となり、其明兎の紀文と、靈妙の寫眞とに因りて本書とはなれり、從來此勝を髣髴する者は、獨り山陽の紀文に因て神魂馳するのみなりしに、著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り、其未だ寫さざりし奇勝とを寫し猶且山陽の記を附したれば、斯書を一讀せば、復た溪を訪ふを要せず、再讀せば遊意勃興、好嚮導を得たるを謝せざるべからず。

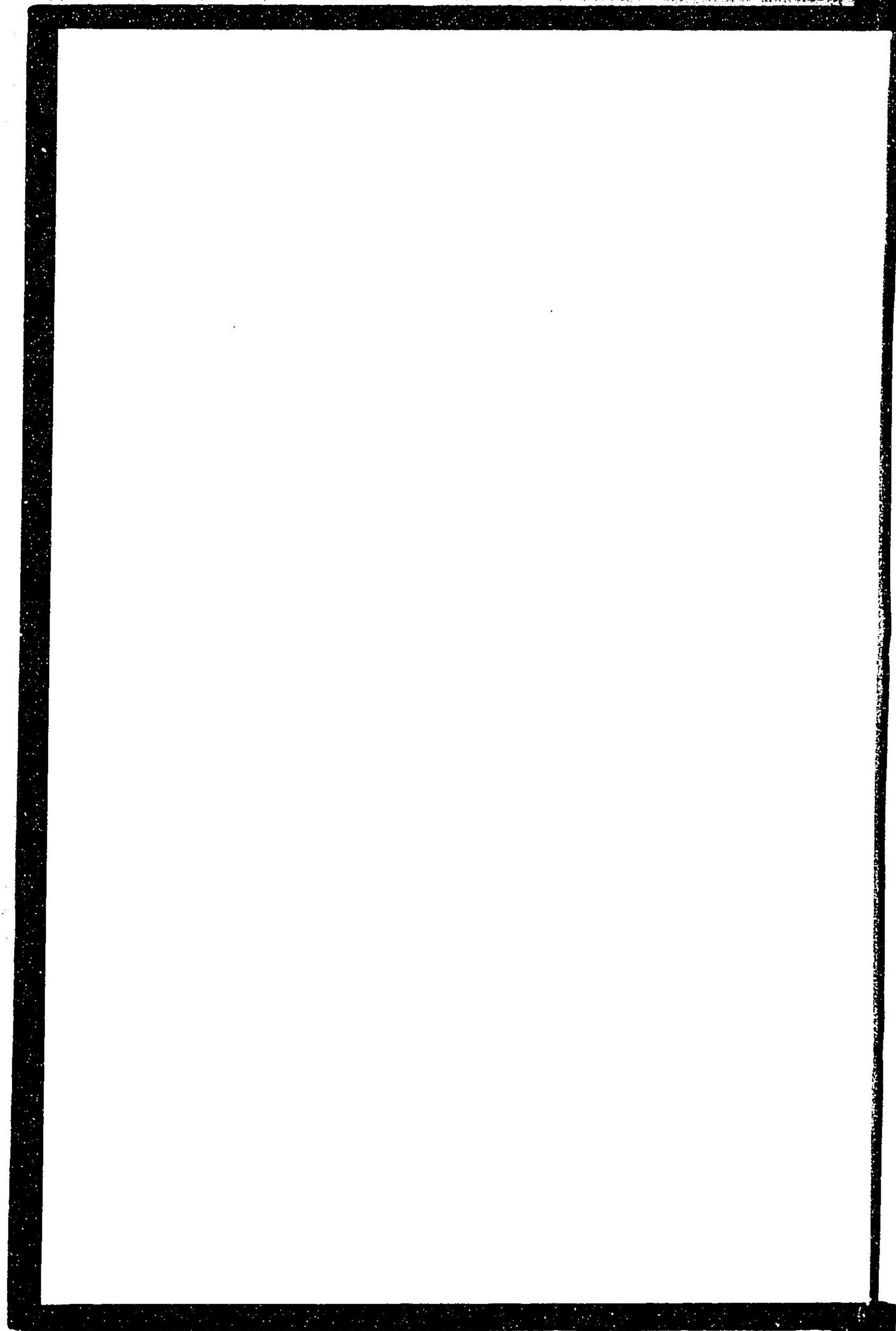




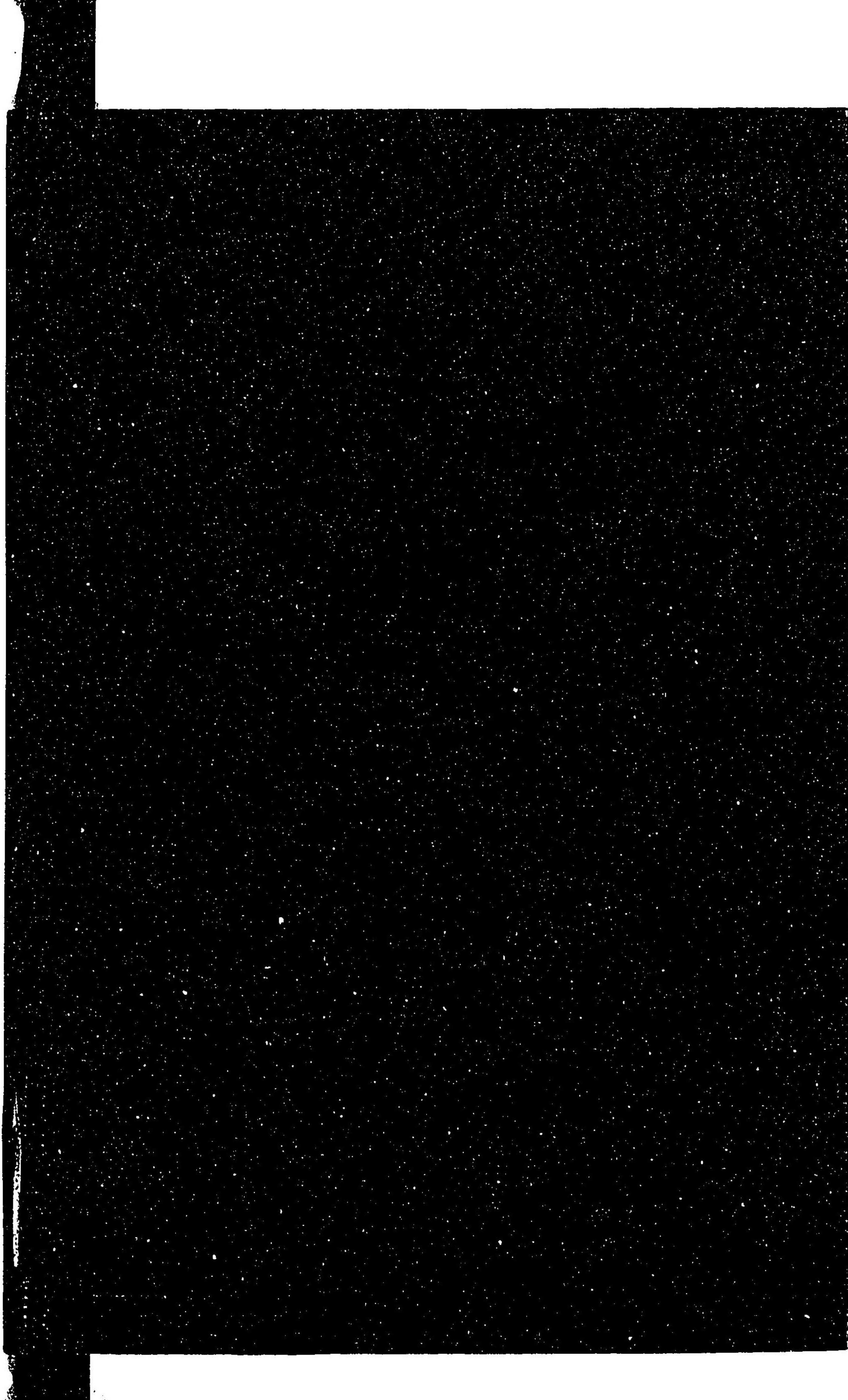














88

84

026953-000-2

88-84

米国漫遊雜記

松井 広吉 / 著

M34

ADG-0078





